紛れる彼の隠密演義(仮)

どーぶつな仙人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紛れる彼の隠密演義（仮）

【Ｎコード】
Ｎ２９４３Ｐ

【作者名】
どーぶつな仙人

【あらすじ】
普通の生活を送る用意ができていた彼。人気のない職業とは言え、不自由らしい不自由はなく過ごすことができたかもしれない。けれどちょっとあおられてその安全な道からは落ちてしまう。落ちた先はまさかの後漢時代、それも末期も末期だった。
踏み外した故の安全ではない生活を彼はいったいどう過ごしていくのか。
恋姫ベースの一風変わった三国志演義。ちょっとのぞいてみませんか？

第零話　仙人という称号

世界中に海があるのだからそれを知らない人間はごくわずかなわけで。

そんな中海で釣りをしたり漁をしたりする人はその半分以上を占めるわけで。

だからきっと自分がそうなったのはたまたま運が悪かっただけだと思う。そう思いたい。

「やはりお主はおもしろいな。いい獲物がかかった」

今日ほど厄日を呪うこともない……

父親に連れられて初めて釣りに行ったのはまだ物心つく前だったそうだ。普段は憮然としている父親だったが、そのときはまるで子供だったことをよく覚えている。もう少し大きければ担がなければ

ならないほどの魚を釣ったときの目の輝き様は自分と同じくらいだった。

あの父親を見て自分は釣りを好きになったのだ。物心がついてしばらくは父親と一緒にしか行かなかったが、小学校にも上がり友達が何人かできる頃にはその友達と近くの海まで自転車をこいで釣りに行った。

そんなほほえましい過去からすでに十年。高校生の自分は原チャで少し遠くの海まで釣りをしに行くようになっていた。十八歳の受験生にもかかわらずこんな事をしていいのかと周りからは言われるが、家族からは一切文句を言われない。というのも漁師になるつもり……というよりすでに半分漁師だからである。

幼い頃から漁協によく顔を出していたためか、船によく乗せてもらっていた。中学生にもなれば青二才ではあっても戦力として扱われる。

その頃からのつきあいである漁港では漁師になるのだろうと思われているし、そのつもりであったため否定なんてしていない。そのため高校生というまだまだ青二才という言葉が似合う相手であっても船の上ではいっぱしに扱われている。

今はコスト高だとか制限だとかで割に合わないと言われる漁業ではあるが、ポイントや海流を知っていればどうにかならないこともない。古株の人や経験の多い船長からの言葉であたりの海をよく知る自分にはまさに天職だと思う。

今日も今日とてそんな知識と時々ソナーに頼って魚群を追いかけていたのだが……

「ちっ……時化がでかすぎる。おい冬彌！　水を掻き出せ！　幾ら何でもかぶりすぎだ！！」

「そんなこと言ってる場合じゃねぇ！　船体ちゃんと保てよ！！　なんで横波がくるんだよ！！」

今回ばかりはその天職ってやつを恨みたい。大時化も大時化。湾の中にいるわけでもないのに数メートルの波が当たり前のように船をたたいていた。

「じゃかしい！！　ここいらは岩礁があるのを忘れたか！　文句言ってる暇があったらさっさとロープをしまえ！」

「わかってる！！」

とはいえこっちも必死である。今できることをやりながらこのやり場のない怒りを向けるのはこの場にいる父親。そのため二人して怒鳴りあいになる。

「冬彌！　でかいのくるぞ！！」

「ああ！？　なんだって！　雨がうるさくて聞こえねぇ！！」

「でかいのがくるって言ってんだ！　いいからさっさとひっこめ！！」

「だからなんだって！？」

正直に告白しよう。なんとなくこの先の展開は頭の中をよぎっていた。だがここで道具を片付けてしまわなければこれが流されてしまう。道具なら買い直せばいいのかもしれないがここに出ている物の量も多く、流されてしまえばすぐに漁に出られる状態ではなくなってしまう。

なにより自分がこの船に乗るようになって一度も買い直されることなく使い続けてきた道具を放っておくことができなかった。青臭い理由かも知れないが思い出の品ってやつは簡単に、それも自分からでない失い方はしたくなかった。

なかなか戻ってくる様子のない息子にじれる父親の怒鳴り声がまだ聞こえるが、今はそんな場合ではなかった。それは父親が焦燥に駆られているからというわけではなく、冬彌が道具のことを考えているからでもない。

次の瞬間、実に優に十メートルを誇る波が船体にたたきつけられた。

「「！！？」」

振動に気がついたときはもう遅い。甲板でもなお高校生の身長を軽々と超える波は、しゃがみ込んでいた冬彌を巻き込んで反対側の海へ抜けていった。

「冬彌ーーー！！！」

これを最後に覚えていない。父親の最後の声だけやたら耳にはっきり聞こえてなぜか無性に泣きたくなった。

気がつけば写真で見たことのある万里の長城のような長い長い城壁の上に立っていた。一見ＣＧの様にも見えるが、触ってみると質感は確かに石だ。

「どこだ？　ここ」

ついさっきまで海にいたはずだった。間違ってもこんな山の上にいるわけがない。

「船頭多くして船山に上るとはいったものの……うちの船って二人

だけなんだよなぁ」

船頭多くして、と言うほど船頭はいない。むしろ人さえいない。そして肝心要の船さえ見あたらない。訳がわからないことばかりだった。

「ふむ……やはりたまには休憩も必要と言うことだな」

「誰だっ！！」

先ほどまで全く聞こえてこなかった声が突然耳に届く。慌てて周りを見回しても木と石しか見あたらず、言葉を話す存在ところか動物や虫さえ見つからない。

気のせいかと思い一息つくと、

「こらこら。あまりため息をつくものではない。幸せが逃げてしまうじゃないか」

「っ！」

「身構えなくてもいいぞ？　とって喰うつもりなんかこれっぽっちもないし、男をいたぶって喜ぶ趣味もない」

いつの間にか正面に男が立っていた。ひげがしっかり蓄えられて

いるが、顔立ちを見ると少年と言っても過言ではないかもしれない。やたらひげが作り物めいて見えた。

「とりあえず先ほどの質問に答えようか。私の名前は呂望、一般には太公望と呼ばれているよ」

「はぁ？」

「状況が飲み込めていないようだからゆっくり説明してやろう。そのくらいの時間はあるしな」

まずは落ち着いて聞いてほしい。そう言った少年の目は非常に優しかった。

目の前のひげ少年が言うには自分はすでに死んでいる。海に転落したのは間違いないそうだ。そして釣りをしていた呂望の針に引っかかったのだという。

「太公望の針って言えば縫い針みたいにまっすぐで獲物がかからないって言うあれか？」

「まさしくそれだ。あたりがくるのはずいぶんと久しぶりだったからな、それはそれは興奮したよ」

「それで、ここは死後の世界だと言うことか？」

「……まあな。お主に関して言えば奇跡の生還などない。海に投げ

出された後、程なくして呼吸と心臓が停止。運良く体が浜に打ち上げられるものの、すでに事故から二日がたっていた」

「そうか……親父は？」

「無事港に戻ったよ。その日から酒浸りだがな」

何となく予想はしていた。親父は何かがあると酒を飲みたがった。いいことなら笑いながら楽しそうにそれを語ったし、悪いことなら無言でちびちびとなめていた。

「今日でちょうど事故から七日だ。おまえの葬式もそろそろ始まる頃だが……見るか？」

「見られるのかよ……」

「仮にも仙人なのでな。時間調整のいらないリアルタイムのことならたいしたことではない。それにまさか人が釣れるなどと思ってもみなかった。だから調べさせてももらったしな」

いい家族を持ったようじゃないか、と穏やかに笑っている。

「……いや。やめておくよ」

「……家族の顔を見ておかなくてもいいのか？」

「漁に出るのはいつも命がけなんだ。親父だって母さんだってそれをわかってないはずがない……だからいいんだ」

それに落ち着いてそれを見てしまえば泣き出してしまうのは容易に予想ができた。

「そうか……」

「ところで、俺はこれからどうなるんだ？」

死後の世界など思ってもみなかったわけだが、こうして死んでみると案外生きているときとそう大差はない物だなと思う。

「そのことなんだがな……ここは単なる死後の世界ではないのだよ」

「はあ？　死んだ後に行くところって言ったら三途の川、天国、地獄、えんまの裁判所、極楽浄土ってところだろ？」

「ま、まあ普通ならそうなんだがな……」

言いよどむ太公望（自称）。そこまで言いにくいことでもあるのだろうか。

「簡単に言えばここは仙人たちが暮らしている仙境という場所だ。

わしの他にも仙人たちがいる」

「……それで？」

「ここは仙人たちが暮らす場所なのだ。もったいぶって言うのも何だからはっきりと言うが、仙人ではないお主が見つかれば……殺される」

「は？　俺は死んでるんだろ？　それなら殺されるっておかしくないか？」

「そうではない。それにお主の死は肉体的な死であって精神的な死ではない。見つかれば魂を打ち砕かれてここの世界の糧になる」

その先には何にもない。転生することも仏になることもない。

その言葉に背筋が冷たくなった。

「とはいえあの針にかかるのは仙道に通じている相手だけなのだがな……」

お主からはそう言ったたぐいの力が感じられない。

「針が壊れていたとか考えられないのか？」

「可能性はない訳じゃないが仮にも仙術を施してあるからな。気づ

かないわけがない。それに今まで釣り上げたものはたとえ熊であろうと鰯であろうと皆仙術が使えた」

……俺は鰯以下って事ですか？

思わず手をついて落ち込んでしまう。

「う～む……となるとな……やはり……」

絶賛落ち込み中の自分を無視して楽しいですか太公望さん。

何とか気を持ち直して顔を上げるとおもしろそうに口をゆがめた仙人が……いやこれはむしろ妖怪のたぐいでしょう？

「何を考えとるか何となくわかるが……とりあえず否定はしないでおこうか。おもしろいことを思いついたのも確かだしな」

「心を読まれたっ！」

「仙人だからな。それにお主は顔に出やすいようだな。読むまでもなくわかったぞ？」

「もういいよ……それでどうしようって言うんだよ」

「まあよくある話だな。ここに居座られても面倒だからお主の魂を別の世界に飛ばす」

「……輪廻転生ってやつか？」

「ちょっと違うがおおむねそんなところだ。何しろ仙人どころかなれそうな人間ですら貴重なんだ。易々と消えてもらっても困る」

「ちょっと違うってどう違うんだよ」

「簡潔に説明するとだな……」

内容は聞けば聞くほどテンプレートな転生だった。

一、記憶の維持。なんでも正式な輪廻での転生ではないからだそうだ。魂の初期化ができないらしい。

二、仙術知識の習得。仙境にこられたのだから素質はある……らしいので使い方だけたたき込むとのこと。

三、死者との入れ替わり。魂しかない状態の上、無理矢理転生させるから器となる体をどこかで確保しなければならない。そのために死者……正確に言うなら死んだ直後の外傷のない肉体に魂を送り込む。

三番目だけちょっと違うモノだけどむちゃくちゃ言ってません？

「無茶だろうがなんだろうがこれが一番簡単にすむんだよ。労力的にも手順的にも」

「どこに送られるのか知りませんけど、わざわざ仙術をたたき込む意味ってあります？　それに使えないんじゃ……」

「念のためだ。うまくリンクする肉体が安全な場所にあるとは限らないだろ？」

「リンク？」

「体とのリンクだ。素体そのものの波長とタイミングでぴったり合うのを探さないと廃人になるからな。その上死体の条件は腐敗していないこと、即死レベルのけがを負っていないことなんてものもあるしな。まあ多少のけがは大目に見ろ」

恐ろしいことをさらっと言ってのける太公望さん。無事にたどり着けるよね……

「それに使えない訳じゃない。誰でも習得そのものは可能だ。もっとも効果的な使用という意味では保証できないけどな」

それができて初めて仙人を名乗れるのだという。

「それじゃ意味ないじゃん！！」

「まあまともに使えなかったらな。そのときは好きにアレンジしてみろ。案外うまくいくかもしれん」

「投げやりな……」

「仙人なんて基本的に世俗に関して興味がないんだよ。まあいい。そろそろ説明もしたし送るぞ？」

「どこにっ！！」

「だから転生先だ。場所の特定までは面倒だからやらん。仙術に関しては送っている間に覚えさせるから安心しろ」

「そんなので安心できるかっ！！」

「魂を砕かれるよりよっぽどましだろう？　さっそくお主について調べたことも役に立つしな」

「どこまで調べたんだよ！？」

「立葵冬彌（たちあおい）、年齢十八。年齢＝彼女いない歴。好きな人ができるも目で追うのがせいぜい。ラブレターをもらったことがあるが恥ずかしくて会いに行けなかった過去を持つ。そのほかにも恥ずかしい過去が――」

「やめてくれぇぇぇぇ！！」

魂の叫びがあたりの山で反響するのがよく聞こえる。山彦になるほどの絶叫とは我がことながら驚く。

「あ、あまり叫ぶな。見つかったらどうす――」

突然太公望（自称）の顔色が変わる。

「まずいな……今ので誰かがこっちに来そうだ」

「……見つかったら？」

「さっき言ったとおりのことになるだろうな……しかたない。もう少しいろいろ説明したかったが」

その瞬間、ふわっと体が浮いたかと思うと空に吸い込まれるように上っていく。

「悪いがのんびりしていられる時間はなくなった。もう覚悟を決めろ。一気に送る」

「ちょ、まっ――」

「待つ時間はない。行け！」

「――ってはえぇぇぇぇぇ！！」

体をたたく風が痛い。痛すぎてあちこちが切れている。

「――っかく――のしま――れよ――」

太公望の声が聞こえたような気がしたが、あいにくとその中身まではわからなかった。

第一話　食いつなぐということの難しさ

突き抜ける空というのはこういう空を言うのだろうか。そんなことを考えてしまうほど目の前は青一色。ところどころ雲が流れているのはちゃんと空だと言うことを証明してくれていた。
突然目の前が真っ青になれば頭がおかしいのかと思ってしまっても不思議ではない。

「あのやろう……落ちる恐怖はジェットコースターで知っているが、上っていくときに恐怖を感じたのは初めてだぞ」

体を眺めてみればとくにこれといった外傷はなく、問題なく動いてくれるようだった。飛ばされたときについたはずの傷も一切ない。

「……なんにもないな」

周りを見てみると草原も草原。あまり草の丈は高くないが人がよく来る場所ではなさそうだった。
幸い、荒野と言うほど荒れた土地ではなく動物はある程度いそうだ。海は見えないが山は見える。近くに川でもあればいいとは思うが見える範囲にはなかった。

「はあ……」

服装を見るといつも自分が着ている普段着になっていた。なぜか柄の部分まで鉄でできた銛も近くに一本落ちている。銛という意味では使い慣れている分これでもいいとは思うが、どうせなら包丁やら砥石やらの調理器具がほしいものだ。護身用にもなるし。第一、川も見あたらないのに魚を捕るなんてことはできるわけもない。

その上草原にはあまりにも不似合いだ。恥ずかしいことこの上ない。

元の人物は行き倒れだったらしく、その本人のものと思われる服がちぎれて周りに散乱していた。よく見ると李と文字が見える。そのほかの持ち物もいくつかあるが、食料のたぐいは一切ない。おそらく行き倒れだったのだろう。替えの服が数着入っている程度だった。

「はあ……」

幸せが逃げるって言われてもこれでため息をつくなって言う方が無茶だ。

まずは水、それだけでも確保しないと一日や二日で倒れてしまう。どうも仙術を使えば水は作り出せるようだが、効率はあまりよろしくないようだ。なれていないというのに使えばどうなるかわかったものではない。そもそも使えるかも怪しい。

「う～ん……山の麓って大概村くらいはあるんだよな……」

見えている一番近い山は数キロ歩けばたどり着けそうな距離だ。動物を狩ることもできそうな気はするが、熊にでも出られたら食料になるのはこっちのような気がする。仙術を使えばとも思うがあまり現実的ではない。

「いざとなったら仙術で水を出せばどうにかなるよな……」

後ろ暗い決意だとは自分でも思うが、放り出された人間なのだからこの決意ができただけでもほめてやりたい。

「まあどうにかなるでしょ……」

とりあえず獣に襲われても平気なように転がっていた鉄の鍬を拾い、それで草をなぎながら進む。

体力が奪われるのは仕方ないが、こうでもしなければ余計な切り傷でもできてしまいそうだ。

「できれば川でも見つからないかな……」

山の方を目指せば川か村くらい見えてくるだろうと根拠のない自信で我が身を奮い立たせるのが精一杯だった。

まさに荒野という何もない場所に人影が二つ。それも片方の見た目は確実に子供。普通こんなところに子供はいない。どこからか逃げてきたのだとしても、その服には汚れらしい汚れがなかった。

その一方で、もう片方はといえばまるで血の池にでも落ちたのかと言うほど真っ赤。髪の毛も赤いのだから修羅と間違われてもおかしくない姿だった。

「……おなかすいた」

「れ、恋殿(レン)〜。お願いですからもう少しだけ……帰ったらたくさんのごちそうが待っていますぞ」

「……がんばる」

「すでに帰る時間は伝令で詠(エイ)に伝えているので大丈夫なはずなのです」

「……ごちそう」

「後四半刻もいけば帰れますぞ」

馬に乗る二人は実に楽しそうなのだが、馬の方は疲れが出始めているのか息が荒くなっている。
乗っているのは二人、そのことを考えれば当然である。

「……なにかいる」

「恋殿、なにがいるのですか？」

「……わからない」

どうやら小さい方には見えていないようで何度か問い直すのだが、帰ってくるのはわからないという同じ答えだった。

「ん～？　あれは……人のようですぞ」

「……助ける」

「野党かもしれませんぞ？」

「……そのときはそのとき」

「恋殿なら大丈夫でしょうが、何かあったらすぐにたたきのめすのですぞ」

「……わかった」

近くまで来ると、わざわざ馬を下りて赤毛が倒れていた男をつつく。

「うぁあ……」

「……まだ生きてる」

「そうですな。しかし弱っているようなのです」

「……おなか減っただけ」

「れ、恋殿。それだけで倒れるのは……」

「ご飯食べれば元気になる」

「うう……」

困ったような顔をして馬上を見上げる赤毛。何か感じ入るもの（？）があったようでそれを否定できないでいた。

「……兵士と同じ食事でよければすぐに準備できると思うのです」

「じゃあ連れて帰る」

その一言に馬が不満そうな視線を赤毛に向けたのだとか。

「……帰ったら体洗ってあげる」

「ヒーン！」

第一話　食いつなぐということの難しさ（後書き）

初めまして。文章の練習もかねて書いてみましたw

ぶっちゃけあまりうまくはないと思います。二次創作とか初めてですし……

が、いちファンとして書いてみたくもあり、自分で言うのも何ですがそこそこ関係ある知識も幸いなことに持っているのでそこら辺を使えばどうにかなるかな～とか思ってたりします。（甘いかな？

そんなこんなでちまちま更新していくので宜しくお願いします。

誤字脱字、間違いの指摘、感想などどんどん送って下さい。待ってますｗｗ

荒らしはできればご遠慮願います。（自分で荒らしだと思わなければ送って下さい。思い込むのはだめですｗ）

第二話　感謝すれど恐怖には勝てぬ

起きてみるとそこには手ぬぐいらしき布を持った女性二人。近くに桶があることからそれを浸すために用意したのだろう。

「あら、目が覚めたようですね。身体に異常はありませんか？」

「えっと……ここはどこです？　何でこんなところにいるんでしょうか？」

どうやら看病されていたらしいと判断した冬彌は至極当然な質問をした。相手もその質問は織り込み済みだったのだろう。特に慌てた様子もなく質問に答える。

「お城ですよ？　なぜと言われれると将軍様が助けたからですが」

「助けた？」

「ええ、行き倒れだったとか。外傷はなかったのですが、荒野で倒れていたそうですから拾われなかったら間違いなく死んでいましたよ？」

「私、報告に行ってくるね」

「うん。お願い」

何の用事もない人間が城に来ることはまずない。そこは政治の中枢であり、場合によっては文句を言っただけで牢屋に入れられることもある場所なのだ。一般人が必要もないのにくるなどと言うことは考えられなかった。

だから冬彌が片方の女性が出て行ったのに気がつかないのは仕方ないといえることだった。

「そ、そうですか。えっと念のため地名はなんて言うんでしょう」

なぜそんなことをしたのかと詰問するような視線だったが、冬彌にはどう答えていいのかわからない。まさか、気がついたらそこにいましたではすまないだろう。

だからごまかすことにした。

「涼州の金城です。助けられてここにくるなんて運がいいですよ？近くにここ以上の医術士がいる町はありませんから」

涼州。それは冬彌の知識が確かならば中国の地名である。羌族の住む地方のすぐ隣。なにかと隣国から攻められることの多かった土地のはずである。

その呼び名は有名な時代で言えば三国志の時代に名前があった。そう、あの悪政を敷いていたという有名な彼の名前とともに。

できればはずれてほしいと思いながらも冬彌は口を開いた。

「ここを取り仕切っているのはどなたでしょうか？」

「決まっているじゃないですかーー」

「目が覚めたって言うのはホンマかー！？」

質問の答えを遮り、突然上半身は胸にさらしを巻いただけというあられもない格好をした女性が一人入ってきた。

「と、突然どなたですか？」

「しょ、将軍様！？　このようなところまでどうされたんですか！？」

「こいつに用があってきたんや。うちが見とるから仕事に戻ってええで」

「は、はい。宜しくお願いします」

女性はしどろもどろになりながらも丁寧にお辞儀をすると、おかゆのようなものを置いて出て行った。

「せっかく用意してくれたんや。とりあえずこれ食べとき」

差し出された器を受け取ると冬彌は一心不乱にがっつく。
話によると二日ほど気を失っていたようで、そのせいか冬彌の空腹も限界を超えていた。

できればたらふく食べたいと思った冬彌だったが、よく考えてみれば突然押しかけた迷惑な人間でしかないため文句など言える立場ではない。
いきなり大量に食べても胃が受け付けないだろう。一度いれたからすぐにでも入るようになるだろうが。

「おお～、そんだけ食べられるってことはちゃんと元気になったようやな」

「ええ。あ、食事ごちそうさまでした。ええっと……」

「そのくらいかまへんて。それにこっちが無理矢理連れ込んだようなモンやし」

カラカラと笑うさらしさん。どうも小さいことは気にしないおおざっぱな人のようだ。入ってきたときに開かれた扉は開きっぱなしだった。

冬彌は名前を聞こうとしたのだが、それもあっさり遮られる。

「助けていただいたんですからお礼くらい受け取って下さい」

「それやったらうちやなくて恋（レン）にいったってーな」

「そのええっと……」

「あ、今のは真名やで。呼ぶのはやめとき」

「真名？」

冬彌はその言葉に聞き覚えがない。

さらしさんは不思議に思いながらも冬彌が知らないことを確認するとわざわざ説明してくれた。

「真名言うんはその人の一番大切な名前なんや。この人なら呼んでもエエと思ったら改めて真名を名乗って互いに呼びあうんや。せやからその人が許すまでは絶対呼んだらアカン。無条件で呼んでもええのは親くらいや」

「そんなに大切なものなんですか？」

「そうや。その場で首はねられても文句は言えんし、誰も同情してくれんで？」

その言葉を聞いて寒気が背中を駆け巡った。

さらしさんは相手が名乗った名前を呼べば特に問題はないというが、これ以上聞いてもろくな話ではなさそうだ。

「とにかく、その人が助けて下さったんですか？」

「そや。天下の飛将軍様っていえばわかるやろ？　遠征から帰ってきたと思ったら一人だけ抱えてくるもんやから何事かと思ったで」

「そうなんですか。それでその人はどこに？」

「……驚かへんの？」

「なにがですか？」

「……まあエエわ」

「で、助けて下さった方は今どこに？　挨拶くらいはしたいのですが……」

「それや！」

我が意を得たりと言わんばかりにズビシと指を差す。

それはずいぶんと様になっていたが、まるで犯人呼ばわりをする探偵のような仕草だ。

「もうすぐ夕飯でな、今日は珍しくみんなの時間がおうたし一緒に食べようって話になったんよ。それで目が覚めたんやったら事情を聞くついでに一緒にどうやって誘いにきたんや」

見ず知らずの人間と同じ釜の飯を食べるというのはどういう神経をしているのだろう。

冬彌にはみんなというのが誰かわからなかったが、このさらしさんと同じように図太いようだ。

「その方が手っ取り早いしな。月(ユエ)もかまへん言うとったし、恋が珍しく一緒がいい言うたんや」

一度主張しだしたら恋は引き下がらへんしなー。

本当になかなかないことなのだろう。月と言うのが誰かはわからなかったが、助けてもらって城の一室で看病されるなどと言うことはまずない。相当上の位にある人に助けられた上に同じような地位にいる人が許したのだろうと冬彌は判断した。

「わかりました。今おかゆをいただいたところなんですけど、正直もう少しほしくて……」

「ははは、そかそか。ならぼちぼち時間やし、あんまり待たせるわけにもいかんしいくで？」

「わかりました。ええっと……」

「あ、そういえば名乗っとらんかったな。まあ全員そろってからでもええやろ。ほないくで」

だが冬彌はここで聞いておかなかったことを後悔するのだった。
そのときまで後半刻。

さらしさんが足を止めたのは優に２０人は座れるであろう部屋だった。机やいすはおろか、柱や壁、窓のサッシに至るまで職人が丁寧に仕上げたであろうことは容易に伺えた。

「さ、ついたで」

「こ、ここですか？」

「せや、せっかくだからここでってことになったんや。うちでもこんなところで食事なんて滅多にないわ」

「そ、そうですよねー。だってここ一見するとお偉いさんの会議室じゃないですか」

優に船一艘は入るほど広い部屋、表面がつるつるになるほど磨かれた長机、そして漆で塗られているのか鮮やかな赤に彩られたいす。よほどのことがなければこのような場所を使うことはない。

「よくわかったなぁ。ここは普段うちらが会議をしとる部屋や。食

事は個々か兵士用の食堂でとるから部屋がなくてな。仕方ないからここを使うことにしたんよ」

「あら、霞(シア)が先にくるなんて珍しいじゃない」

「おそいで詠(エイ)。うちは腹ぺこなんや。見てみいこのへこんだ様を」

「はいはい。でもボクや霞だけじゃ食事会にならないわよ？」

後ろから現れたのはさらしさんの三分の二くらいの身長の女の子。詠と呼ばれいている彼女は助けてくれた人ではないようだ。

冬彌はどうやって相手を不快にさせないかと考えるのが精一杯で会話に参加できない。もっとも二人とも初対面の相手であるため、参加できなくても当然なのだが。

「それで、そっちのが恋が拾ったっていう人？」

「そうらしいで。言われた部屋に行ってみたらおったから連れてきた」

「連れてきたって……間者とかだったらどうするのよ！」

「そんなわけあれへんやろ。町の手前で倒れるなんてありえへんやん」

常識的に考えれば町まで歩きでも半刻程度のところで倒れる間者

なんて考えられない。しかもそれが運良く将軍様に助けられて城にはいるなど、どれだけ運を当てにしているのかわかったものではない。

「……それもそうね。ボクならおとりに使うくらいしか思いつかないわ」

「せやろ。だったらかまへんやん。念には念をってことでうちが迎えに行ったんやし」

「わかったわ。月たちが来るまで時間があるし、あなたの話を聞かせてもらいましょうか」

嘘をついたらどうなるかわかっているだろう、とめがねの彼女が態度で物語っている。

もとより嘘をつくような必要もそのために必要な情報もない彼にとって嘘などつけるものではないのだが。

「わかりました。それでなんと呼べばよろしいですか？」

威圧されたこともあるし、丁寧に答える冬彌。慇懃無礼かともとれる態度だが、相手は城に仕える人なのだからこのくらいのことにはなれている。特に気にした様子もなかった。

「え？　ああ、名乗ってなかったわね。ボクは――」

「ちょいまちぃ！」

名乗ろうとしためがねさんをさらしさんが遮る。その上冬彌との間に体まで差し込むという念のいれようである。

「な、なにするのよ！　びっくりしたじゃない！！」

「そらすまんかった。けどな、こいつ飛将軍って聞いても知らんかったんやで？　全員そろってからの方がええわかりやすくてええと思ったんよ」

「はあ！？　そんな人間いるわけ……」

「……ここにおる」

さらしさんは若干疲れた様子で冬彌を指さした。冬彌からすれば一般常識であると予想されることを知らなかったのだからただ縮こまるしかない。

「……そう。わかったわ。じゃあ月を呼んでくるから先に座って待ってて」

「了解や」

「え、ちょっと名前くらい……」

「あとやあと。どうせ全員そろうんやからそのときにしたらエエって」

さらしさんは冬彌を無理矢理部屋に押し込むと、ちょうど奥から真ん中あたりの席に座らせた。

そしてその右側にさらしさんが座る。

「奥から詰めて座った方が……」

「……ホンマになにも知らんのやな。うちらが座ってエエのはここまでや」

侍女に頭を下げられるような立場にある彼女ですら真ん中より少し奥位にしか座れない、その意味に至って顔を青くする冬彌だった。

（無事に生きていられるのだろうか……）

それを決める相手はすぐにでもやってくる。そのわずかな時間ですら彼に走馬燈を見せるには十分だった。

第二話　感謝すれど恐怖には勝てぬ（後書き）

てなわけで三つほど連投してみましたw

書き上げるのに長々と時間がかかるので一旦ここでストップですw

次回は……一月中旬までに二つくらい載せたいと思いますw

応援宜しくw

第三話　武勇持つ乙女たちの姿

走馬燈を三周くらいじっくり見終わったころ、冬彌が座るよりも上座の席が全て埋まっていた。
冬彌の真正面には誰もいない。しかし半分意識を飛ばしてしまっていた彼は挨拶されたのか、またどんな人が入ってきたのかすら全く気にとめることができていなかった。

「全く、恋殿(レン)が挨拶してるのに無視を決め込むとは……それが命の恩人に対する態度なのですか！！」

「そうは言うても仕方ないやろ。連れてこられた場所が場所やで？
その上これから一緒に食事って言われたら普通の神経なら気絶してるで」

「でもさすがに挨拶を返されないとは思わなかったわ。入る前にはちゃんと話できたじゃない」

「み、みなさん落ち着いて下さい。これからご飯なんですし、おいしくなくなりますよ〜〜」

「……月(ユエ)の言うとおり。ご飯、おいしくないのダメ」

「せやな。んじゃそろそろ飯も届く頃やし、この男に気ぃつけたらんとな」

さらしを巻いた女性は席から立ち上がるとゆっくりと腕を振り上

げ……

「ほいっと」

「ーーーーー痛っっってぇぇぇぇぇ！」

容赦なく振り下ろした。

「さて、気ぃついたか？」

「なにも殴ることはないだろっ！」

「ふん。気がつかない方が悪いのです。ねねだけでなく恋殿まで無視しやがるとはどういう了見ですか！」

「……ねね、落ち着く」

「恋殿がそういうなら……後で覚えているのです！」

「それじゃ、全員そろったことだし、夕食にするわよ」

「へ？　あ、あのなんて呼べば……？」

仕切っている様子のめがねさんに声を掛けるがあいにくと名前がわからない。

はぐらかされてきたとも言うが。

「ああ、そうだったわね。まだ名前教えてなかったんだっけ？」
「面倒やから全員そろってから言うたしな」
「詠（エイ）にしては落ち度ですぞ」
「なっ！　ボクじゃなくて霞（シア）の提案なんだから文句ならそっちに言ってよ！」

ぎゃあぎゃあと騒ぎ出すめがねさんとちっこいの。ちっこいのはさらしさんの半分もあればいいほうだろう。

ひとしきり騒いだところでようやく冬彌に気づいたようだった。

ようやく自己紹介となったようだ。まずはめがねさんからだ。

「改めて名乗らせてもらうわ。姓は賈（か）、名は？（く）、字は文和（ぶんわ）」
「……呂布（りょふ）、奉先（ほうせん）」

その向かいの赤毛さんが名乗る。しかしその口から出てきた言葉は冬彌の想像を超えていた。

はっきり言って寝起き、空腹のダブルチョークスリーパーによって活動限界を迎えている冬彌の頭にはオーバーワークだ。聞こえて

いるはずなのだが、その内容が理解できない。

（は？　賈？？　呂布？　そんな馬鹿な……）

しかし周りはそんな冬彌の様子に気がつくことなく進めていく。

「うちは姓が張、名が遼。字は文遠や。よろしゅうな」

「ねねの番ですな？　姓は陳、名は宮。字は公台。恋殿になにかあったら承知しないのですぞ」

（え？　ちょっとまて。そんなメンバーの中で一番上座に座るとしたら……）

そこに目を向けると銀色の髪をした人畜無害そうな少女。身長はめがねさんと同じくらいだろう。他の人に比べてやたら装飾の激しい服を着ているのだから当然彼女たちより身分は上だと推察される。

「わたしの姓は董、名は卓。字は仲穎です。体はもうよろしいんですか？」

「えええええ！！！！！！」

ちょうど食事を持って入ってきた侍女さんがその声に驚いて食器

を落としてしまったのも無理はないだろう。

彼の叫び声は門番にすら届いていたという。後日、彼は門番、侍女を始めこの声で迷惑をかけた人たちに謝りに行くのだった。

次々に料理が並べられていく中、話題に上るのはその豪勢な食事についてではなく、端から見れば変人にしか見えない冬彌のことだった。

「突然叫びだしてどうしたのよ？」

「頭でも打ってたんと違うか？」

「むう……それでは質問も尋問も意味がなさそうなのですぞ」

「でも詠ちゃんがさっきまで普通に話してたんだよね？」

「そうよ。それから頭を打った様子もないし」

「そんなことなかったで。うち、ずっと一緒におったし」

陳宮の発言は間違いなく狂人に対するそれだろう。冬彌からすれば失礼極まりない。

いったい何があったのだろうと腕を組む賈?。

その疑問に答えたのは他ならぬ冬彌本人だった。

「い、いえ大丈夫です……ちょっと驚いただけで私は至って正常です」

自分でも不自然だと思えるほど丁寧な言葉。しかし目の前に偉人がいればそうなっても何ら不思議なことではない。たとえそれが悪政を敷いた相手とはいえ、本来なら会うことなどできない有名人であるのだから。

「そ、そう?　ならいいんだけど」

「詠、今はそやつの心配ではなく質問する方が先なのですぞ」

「うちらがって言うよりは恋が気になってるみたいやけどな」

張遼が言うには下町の医者に診せようとしたところ、呂布が城の医者に診せると言って聞かなかったらしい。

なんでも呂布が頑として譲らないのは動物のことと食事のことだけらしい。

「せやからなにかあるんやろうな～って期待はしてんねん」
「それについては同感。恋の勘は外れることの方が珍しいから」
「……みんなが好きそうだったから連れてきた」
「みんな？　うちらのことか？」
張遼の言葉に呂布はふるふると首を横に振る。
「……うちにいる」
「恋の家にいる動物たちのことね。でもそれだったら個人で雇ってもかまわないわよ？」
賈？はそれを聞いてほっと息をついていた。だがその一方でわざわざ呼び集めた意味がわからないと口にしている。
それはさすがの陳宮も同じだったようでもう少しわかりやすく、と呂布に言っていた。
「お散歩がお城の中……」
「ああ、つまり散歩させるときに中を使うこともあるから許可がほしいってことやな？」

張遼の言葉に今度は縦に首を振る呂布。だがその一方でまたも唸る賈？がいた。腕組みをしているのがデフォルトなのだろうか。

「できれば素性のわからない人間を中に入れたくないんだけど……」

「……詠」

「うっ……」

どうも呂布相手に強くは出られないらしい。

見ていればその気持ちもわかる。呂布というたいそうな名前ながら、目の前に実際に存在しているのはなぜか小動物を想起させる女の子。いくら身長がそこそこあるとはいえ、行動のいちいちがなぜか心のどこかに引っかかるのだ。

これならその有名な武の部分ではなく呂布個人というその一点においてでもどこかでファンができてもおかしくない。

狙ってやっているわけではなく自然にやっているところが末恐ろしい。

「詠ちゃん。わたしも悪い人じゃないと思うよ？」

「月まで！？」

「だって恋さんがそういってるんだよ？」

「それはそうだけど……」

「詠は恋殿が信じられないとでも言うのですか！？」

「恋が信じられないんじゃなくて恋が連れてきた人を疑ってるだけよ！」

端から見れば完全に子供のけんかである。しかし彼女らが名前の通りの人物であるならその意味は変わってくる。

片や自分の将に全幅の信頼を持って信じ、片や国の害を取り除こうと思案する。どちらも軍師としての立場を考えれば至極まっとうな考えだ。片方は盲目過ぎるかも知れないが……

「霞はどう思う？　許可を出してもいい？」

「んー。恋が言うんやしなぁ、悪いことにはならへんと思うでー」

「そう……いいわ。許可を出しても」

「……ありがと」

「だだし、入れるところは制限させてもらうけど」

「……しょうがない」

さすがにこれは呂布も納得したようだ。

しかしこれでも十分以上に破格の待遇である。

将軍職から直接雇われるどこの誰ともわからない人。普通に考えればたとえ将軍であろうと一番地位の高い太守であろうと横暴以外の何ものでもない。

それが許されるほど信頼されているのだろう。

「念のため言うとくけど、何かあったときは恋が責任とるんやで？」

「……わかってる」

「ならうちから言うことは何もないわ」

「……えっと」

呂布が冬彌の方を向いて小首を傾げる。

「ああ名乗ってませんでしたね。私は……」

そこで冬彌はふと思う。

ここが仮に中国であり、字が使われているということはまず名前が変に思われてしまう、と。

現代の日本に生まれた冬彌は当然姓と名を持っているわけではあるが、まず音が違う。基本的に中国の姓は一文字である。その上訓読みなどと言うあり得ない読み方をする姓を名乗るわけにはいかない。

「姓はおそらく李。それ以上はわかりません……」

そこまで考えておきながら、出た結論は怪しさこの上ないものだった。

「わからないですと？　冗談にしても笑えないのです。そもそもその姓はどうやって知り得たのですか？」

「気がついたときには衣服がちぎれて半分裸の格好でいました。どうしてそうなったのかはわかりませんが落馬でもしたのかもしれません。幸い荷物はあったので代わりの服を着て町を探しました。姓は破れていた服に縫い付けてあったものです」

どこかの誰かがもっともばれにくい嘘は真実を織り交ぜた嘘だと言っていた。冬彌はとっさにそれを思い出し、事実の中に小さな嘘を混ぜたのである。

「つじつまは合ってるわね。それで李さん？　幸い恋があなたを雇ってくれるから生活の心配はしなくていいわけだけど、月になにかあったら承知しないからね」

「詠ちゃん、心配しすぎだと思うよ？」

「しすぎてしすぎることはないの」

「月、詠の言うことはもっともやで。月はお偉いさんなんやからそのくらいでええんよ」

「へぅ～……」

困ったように泣く（鳴く？）董卓。

（何だろう？　非常に頭をなでたい！！）

それとともに冬彌の中にわき上がる衝動。
だがここでそんなことをすればどうなるかわからないという考えがどうにか彼を押し止めた。

「仕方ないわね。しばらくは監視をつけることで妥協するわ。恋もそれでいい？」

「……しょうがない」

「それから……李さん。あなたもボクたちの指示には従ってもらうわ。いい？」

「……はい」

冬彌に従う以外の選択肢はない。放逐されてしまえば間違いなくのたれ死ぬだろう。

もちろん仙術によるサポートはできるだろうが、期間が長いか短いかの違いでしかないであろうことは容易に想像できた。

「でもなー、姓だけだと呼びにくいやろ？」

「そうね。うちにも李？がいるくらいだし間違われやすいかもね」

「……それは確かに困るのです」

「せやろ？　だったらせめて名だけでも思い出してもらわんと」

そのとき冬彌の頭にはある名前が浮かんでいた。本来この時代に存在するはずのない名前。そして何より自分の様子を端的に表す名前。

それが、

「――でしたら鉄拐、とお呼び下さい」

実際は鉄製の銛なのだが、鉄杖を彷彿とさせるそのフォルムはちょっと見ただけでは飾りがついた棒のようにしか見えない。

「鉄なんてなかなか物々しいわね」

「詠ちゃん、いくらなんでも失礼だよ？」

董卓の言うこともももっともであるが、賈？の言うこともももっともだ。冬彌には、そのほかの陳宮や張遼にも苦笑することしかできなかった。

呂布だけは特に変わった様子もなく眺めているようだったが。

「それはどういう意味なんや？」

「私が気づいたとき、鉄の棒を持っていました。先には小さな穂先のようなものがついていましたが、それを杖として使うことでここまで来ることができたんです。ですから名前が思い出せない間はそれを名乗ろうと思います」

「ふうん。それもいいんじゃない？」

「姓が李、字が鉄拐か。名のほうはおいおい思い出すやろうし、真名はもっとらんかったな？」

「真名がない？　変わってるわね」

「真名の風習を知らんかったからな。忘れたかないかのどちらかやろ」

「詠、霞、話がまとまったなら食事にするのです。恋殿が待ちくたびれているのですよ！」

陳宮が腕を振り上げてまで自分の意見をアピールしている。

なるほど。呂布の方を見れば視線が料理に固定されている。若干うつろかもしれないその様子は飢餓の極みにいる人間でなければ出すことのできない空気をまとっていた。

「それじゃあ食べましょうか。恋さん、どうぞ」

「……おいしい」

「鉄拐も食べるとええよ」

さっそくぱくつく呂布。張遼はそれをちらっと眺めてから冬彌にも食べるよう促した。

「では遠慮なく……」

「少しくらい遠慮しろなのです！」

「……病み上がりはしっかり食べる」

「恋の言うとおり。仲間が増えるのは悪いことではないでしょ」

「詠まで無警戒とは、見損なったのです！」

先ほどまで視線の厳しかった賈?も今一番集中しているのは目の前の食事だった。

「一度受け入れるって言ったからにはその程度の信頼もできなくてどうするのよ」

「せやで。ましてや恋からの推薦なんや。気にする方がばからしいで」

気にしているのは陳宮だけのようで、董卓も呂布もおいしそうに食事をしている。

「もういいのです！　ねねも食べるのです！！」

呂布に負けない勢いで食べ物を詰め込んでいく陳宮。

（絶対詰めすぎだよなぁ……）

陳宮は予想を裏切らず、すぐに胸をたたいて苦しみだした。

「慌てるからやで」

「ああもう……そんなに急いで食べるから。はいお水」

「……んぐっ……んぐっ……ぷはぁっ」

一気に水を飲む陳宮。器いっぱいに入っていたはずの水は相当な量だったはずなのだが、それでも飲みきってしまった。

「し、死ぬかと思ったのです……」

「そないに食べられるわけないやろ」

「……ん？」

食事に集中していて陳宮の様子に気がつかなかったのだろう。ようやく呂布がほおをぱんぱんにしながら顔を上げた。

「……食べられるのおったな」

「恋も気をつけなさいよ。天下の飛将軍が毒でもないのに食事で死にましたなんて笑い話にもならないわよ？」

「……（コクコク）」

しっかり頷く呂布だがそれでも食べ物を詰め込もうとするのをやめない。まるでリスのようだ。
それを見た賈?や陳宮が詰めすぎだと言うが、全く意に介さずなお食べる食べる。

そんなほほえましい光景を董卓はゆっくりと食事をしながら、穏やかな笑みで見ているのだった。

第三話　武勇持つ乙女たちの姿（後書き）

さて、そんなわけで第三話をお届けしました。

ここで一つ、皆さまに聞きたいことがございます。

「ぶっちゃけ、一刀くんはどうすべきか」

当初の予定では出さないつもりだったのですが、恋姫ベースだと銘打っているのでだしたほうがいいかなー……とか思い始めました。（たぶんいた方がストーリーを進めやすいし……）

そんなわけでアンケートですw

1．出さない方がいい。（作者がんばれ！　もっとがんばれ！　おまえならできるだろおぉぉぉぉ！！　難易度不明）

2．出してもいいんじゃね？　一刀くん、魏の種馬。（ぶっちゃけこれは結構書いている人が多いので難易度高いよ？）

3．出した方がおもしろいよw　一刀くん、呉の御使い。（オリ主ここのほうがいいんじゃね？　でもそれも多いよねー。難易度そこそこ？）

4．出せよ。出すんだろ？　一刀くん、蜀の御輿。（はっきり言ってここが一番種馬でへたれだよね？　ぶっつぶせ！！　難易度一刀くんの種馬度に依存）

以上、宜しくお願いします。なお、1になるためには2～4に比べて3倍の票を必要とします。なぜなら他は一応出すって選択肢だから！

そんなわけで出さないには条件がつきまーす。なお、一人一票でおねがいします。

感想欄に番号だけでいいのでよろしくｗｗ

第四話　仕事という基本的な事柄について

それからはやっぱり何かと口論をする陳宮と賈？、それをたしなめる張遼という早くもなれつつある光景の中で居心地の悪さを感じつつ食事を終えた。
董卓は終始笑顔で呂布は常にほおをぱんぱんに膨らませていた。

「それじゃ食事も終わりやし、うちは戻って寝るわ」
「ボクも部屋に戻るわ。月（ユエ）もそろそろ戻ってね」
「うん。今日やることは終わったからもう寝るね」
「ねねたちも家に戻るのです」
「腹八分目……」
「あれだけ食べておいて八分目……？」
「？　まだ足りないくらい」
「いつものことや。気にしたらアカンで」
「いや、でも明らかに食べた量が……」
「気にしたらアカン」
「……わかりました」

「それじゃあ鉄拐、あなたの雇い主は恋(レン)だから仕事とかは恋に聞いてね」

「了解しました」

「……ついてくる」

「行くのですぞ」

わざわざ遅れるなと注意する陳宮だが、すたすた歩いて行く呂布の足は速い。もちろん冬彌と比較すれば高いわけではないがそこそこ身長はある。陳宮や賈？と比べるとずいぶんと高いし、また武官でもある。そのためか歩幅は身長を鑑みれば十分広いわけで、その横を歩く陳宮は必然的に早足になるのも当然と言えよう。

「何ですか？　ねねに何か用ですか？」

「い、いえ特に……」

「？　変なやつなのです」

まさかちょこちょこ歩く陳宮の後ろ姿がおもしろかったとは言えない冬彌だった。

その後、陳宮に再三何か用かと言われながら歩いて案内されたのは、わざわざ城の外から裏に回らなければならないという、不便と

しか思えない立地にある家だった。

「……入って、挨拶」

陳宮曰く呂布の家だというそこに足を踏み入れると、そこは足の踏み場もないくらい動物にあふれていた。

「挨拶……」

挨拶も何も人間なのだから動物の言葉が理解できるわけではない。それは動物たちにも同様のことだと思う冬彌だが、呂布はそんなこと気にしておらず挨拶するよう促す。

「えっと……今日から君たちの世話をすることになった鉄拐です。よろしく」

何か反応があるかとも思ったのだが、動物たちは冬彌を一瞥しただけでそれ以上は何もしなかった。

こうやって挨拶をする意味があまり理解できない冬彌だったが、どうも呂布には何かこだわりがあるらしく、まずここに来たら挨拶から始めるのだと陳宮が言っている。

「恋殿の家族なんですから下手に扱かったら承知しませんぞ！　あと、これが一日の食事なのです」

陳宮が差し出した竹簡を受け取るとその中身は肉だの野菜だの種類は様々だった。しかも日ごとに食事の内容も変えているようで、これを食べたら次の日はこれとずいぶん細かく書かれていた。

「なじみの店なら恋殿の名前を出せばここまで運んでくれるのです。まあこの町の商人には恋殿のことを知っているので大半は大丈夫なのですが、おまえにはその連絡と散歩をお願いするのです」

「は、はあ……」

「……みんな喜ぶ」

「残念ながら、ねねも恋殿も仕事で忙しいからあまり散歩に連れて行ってやれないのです」

よく見ると犬や猫は退屈だと言わんばかりに顔を上げては下ろし上げては下ろしを繰り返している。部屋の隅の方にいる熊やパンダは丸まったまま動こうともしない。

「熊なんかも散歩……ですか？」

「……うん」

「お城の中でも問題があると思うんですが……」

「城の裏にある森なら問題ないのです。元々そこに住んでいたのですから平気なのです」

この時代、開発などできやしないのだから人の暮らすすぐ隣に獣がいてもおかしくはない。しかしまさか城の裏の森という人が大勢住んでいる隣に大型の獣が住むなどというのは非常に考えにくい。

本当に飼い慣らしてあるというならまだわからなくもないが。

「……お願い」

「恋殿は明日から昼、夕方二回の散歩を頼むと言っているのです」

「……よくそれだけでわかりますね」

「当然！　恋殿とねねは通じ合っているのですぞ！」

胸を張って答える陳宮。身長のせいか小さな子がどうだとふんぞり返っているようにしか見えないのがほほえましい。

「……てっかいも今日からここで寝る」

「……へ？」

「れ、恋殿！？」

突然の呂布からの爆弾発言。やもすると核爆弾クラスのものに聞こえてしまうのも仕方がないことだろう。

「みんなの世話する。親同然」

「それはそうかもしれませんが……」

「男なんて所詮けだものなのです！　恋殿と一緒の家で寝るなど言語道断です！！」

（いや……まあそうなんだけどね……）

陳宮のさすがの物言いに心の中で突っ込まざるを得ない冬彌。何せ相手はあの呂布なのである。

どこからかあの台所で出る……とかにらみ合うと飛びかかってくる……とか聞こえてこないこともないわけではあるが、目の前にいるのはつまりはそういう強さを持った人物なのだろう。

冬彌から手を出せばどうなるのかわかったものでもないのである。そんなことは願い下げだった。

「えっと……せめてかけるものがほしいのですが」

「？　いっしょ」

「「えええええっ！？」」

呂布は何を驚かれているのか本当にわかっていないようだ。同じベッドで寝ようものなら呂布に対して異常なまで過保護な陳宮が何をするかわかったものではない。

まさか食事中にあれこれと世話を焼くとは思わなかった。呂布は食べられれば周りなんて気にならないのかそのまま食べ続けていたが。

「同じ家で寝ることも変な噂を立てかねないのです！　ましてや恋殿と一緒に寝るなど……ち・ん・きゅ・う――」

「きっくはだめ」

「あだっ」

何かしようとした陳宮の頭に呂布の拳が振り下ろされた。しかしそれは軽くぶつけただけのようでたんこぶができた様子はない。

「恋殿～。せめて、せめてこやつが寝るときはいすにしてください！　ねねは心やすく眠れないのです！！」

「……いすだとちゃんと眠れない」

「それはそうですが～……」
「私もさすがに同じ寝台というのはどうかと思いますが……」
「明日から大変。しっかり寝る」
「いや、ですから……」
「はあ……仕方ありませんな。恋殿、今日だけなのですよ？」
「……うん」
「ええっ！？」

あれほど否定的だった陳宮が突然折れた。それも盛大にため息をつきながら。

「ここまで言う恋殿を説得するのは無理なのです。それだったら今日だけといって明日から変えてもらった方が楽なのですよ」

何気にひどいことを言う。だがそれは今までの経験によるものなのだろう。その小さな姿から苦労がにじみ出ていた。

「……今日だけ」
「恋殿もこう言っているのです。今日だけでいいから我慢するので

す」

今更城に戻ったところで部屋の用意など望めるような時間ではない。何よりさっきあったばかりの武官、文官たちも寝ると言っていたのだ。

それ以外に知り合いのいない冬彌には門番に追い返されるのがオチだろう。

もはや残された道は一つしかない。

頭痛がするのをこらえつつ、変な噂が立つことを半ば覚悟しながらも了承した。するしかなかった。

「ですが、何かあると困るのでねねも一緒ですぞ」

「？……うん」

口の端をひくひくさせながら呂布の了承をとる陳宮。どうやらうれしいようだが表に出さないようにと必死である。

端から見ればうれしいのは一目瞭然だが、呂布にはよくわかっていないようである。

何かあるも何もまず以て呂布の実力をすれば誰も手出しなどできないだろうに。むしろ陳宮が何かしないかと心配である。

「ささ、今日はやることも残ってないですし、もう寝るのです」

「うん」

「……はぁ。わかりました」

冬彌にできることは平和な朝になってほしいと祈ることだけだった。

「ねね、恋が間にはいりたい」

「こんなケダモノの隣で寝てもらうわけにはいかないのです！」

「……寝るんですよね？　まだ起きているようならいすでいいのですが」

「……ねる」

「……スー……スー」

冬彌が言葉を発した直後、横を見ると陳宮がものすごく幸せそうな顔をして寝ていた。しっかりと呂布に抱きついて。

寝ていても頬ずりしているようにしか見えないのは陳宮のキャラがそういうキャラのイメージで焼き付いたからだろうか。

「はや……」

「ねね、いつもこんな感じ」

「そうですか……」

一番うるさいのが寝た後の呂家では何事もなく夜が更けていく。

呂布も眠りにつくとそこは虫の声と動物たちの息づかいが全てを包み込んでいた。

朝になればまたうるさくなるのだろう。それだけこの静寂が貴重にも思えるが、何もわからない中でその静けさは不安を助長するものでしかなかった。

「……三国時代、か」

正確に言えば今はまだ後漢の時代。董卓や呂布をはじめとする人がいるのなら群雄割拠の時代まではあと少しなのだろう。

太公望がこんなところに送り込んだというのは、おそらく仙術の修行のためと思われる。いろいろな世界をのぞき見ることができると言う彼の地から、わざわざこんな危ない場所を選ぶのにはそれ相応の目的があるように思われた。

「情報がほしい……」

周囲の様子だけでいいから知っているのと知らないのとでは条件が全然変わってくる。

これから何をするかというのも全てそれから。

冬彌は不安を無理矢理押さえ込むために、これからすべきことを自分に言い聞かせながらまぶたを下ろした。

朝が来るまでのわずかな間、この世界で初めてまともにとれる休息をかみしめながら……

第四話　仕事という基本的な事柄について（後書き）

そんなこんなで第五話です。
予定通り二本上げられました。（若干短いのは勘弁して……きりがよかったんだよ……）

さて、一刀くんアンケートの締め切りについてですが、票の集まり具合を見てからと思っています。
でも最大で2月末です。なぜならストーリーがその辺で限界になると予想されるためｗ

日常編をいれてもあと6話くらいで原作と絡むので……

ストックは切れたから未定だけどねｗｗ

そんなこんなで隠密演義（仮……いいかげん決めろよ）を宜しくお願いします。

第五話　この時代に犯罪がないはずがないわけで（前書き）

先日、強盗があったらしく警察が検問をしておりました。免許証を出せといわれ「貴様が犯人か！」というほどではないですが「あんたなんでこんなところにいるんだ？」みたいな聞き方をされました。

警察は疑う職業などと言う揶揄を聞くことはありますが、実際に体験するとなるほどなんておもいますね。あの状況下でちゃんと話せなんて無理だと思いますw

そんな意味も込めたサブタイトル。奇しくも……そんな六話です。

遅くなったいいわけは後書きで……

第五話　この時代に犯罪がないはずがないわけで

呂布の家に居候をすることになって早数週間。なんでも遠征に出ていたという華雄なる将軍に挨拶をし、ようやく主要人物への顔見せが終わった。

今日までは呂家では飛将軍ともあろうお方が寝坊したり、一緒にご飯を食べてたり、それを見た陳宮に跳び蹴りをされたりとほのぼのとした日々。幸いにも動物たちとも打ち解け、ようやく陳宮もあまり邪険に扱わないようになった。

もっとも呂布の優先順位を越えることはできないらしく、仮に冬彌が何らかの作業をしていても呂布の呼び出しなら何があっても応じろと口を酸っぱくしている。呂布本人が近くにいるときなら止めてくれるのだが、少しでも遠くにいようものならキックの後に引きずっていくのだから冬彌からすればたまったものではないのだった。

しかし、なぜこの時代に「キック」などと言う英語が中国にあるのだろうか。日本語が通じる時点でおかしいのだが、英語はさすがに違和感を禁じ得ない。

「今日の散歩はセキトたちだぞー」

家の中の片付けも終えて太陽がだいぶ昇ってきた頃、これがちょうど散歩の時間である。

呂家の中でも一番多いのがセキトをはじめとする犬。次いで猫、

馬、ロバ、そして熊にパンダである。ちなみにどこから拾ってきたのかわからない青い虎の子供もいるのだが、まだ犬サイズで牙がようやく生えそろうくらいだ。なついているためか脅威も特にないため冬彌の中では猫の分類である。

（大きくなったら大変なんだろうなぁ……）

虎が成獣になるまでどれくらいかはわからないが、まだ乳離れしたてくらいだと思われた。そう考えると本当にまだまだ子供だ。熊やパンダの世話を考えれば動じなくても無理はなかった。

「今日はどこへ行こうか？」

今回の散歩には陳宮の飼い犬張々も一緒だ。朝、犬たちをつれているところを見られたため、

「せっかくだから張々もつれて散歩に行くのです！」

と無理矢理押しつけられた。冬彌からすれば十数匹もつれているので今更増えたところでたいしたことではない。

「もう少しで市場だなー。もうすぐお昼だし、一回りしたら帰ろうなー？」

その言葉に対しておのおの好きな形で答える犬たち。しかし甘噛みとはいえかみつくのはどうなんだ。文句を言っても罰は当たらないと思う。

そうこうしているうちに市場に入り、屋台が並ぶ区画まで来ると犬たちがせわしなくなった。

「ご飯は帰ってからだぞ」

冬彌は何度もそう言うのだが、犬たちはなかなか落ち着かない。それどころかあっちこっちで鼻を鳴らしてにおいをかいでいる。

「迷惑になるからやめろー」

綱を引いてたしなめても見るがいっこうに効果がない。
すると突然セキトが市場の奥の方に向かって走り出した。張々たちもそれに続いて一気に走り出す。

「ちょっ……まっ――――」

普段こんなことがないだけにどうしていいかわからない。
ましてや釣れているのは数十匹の犬である。男とはいえまだ体も

できあがっていない上、数の多い犬を引き留めることなどできやしない。

その結果は言うまでもない。無惨だ……

「ん……セキト」

ようやく止まった先にいたのは飼い主である呂布。朝の仕事を終えたのか、のんびりとしているようだ。

「鉄拐もおつかれ……」

「ははは……大変ですがなかなか楽しいですよ」

「うん……ありがと」

そうこうしている間も呂布にじゃれつく犬たち。なでられて至福の声を出しているのもいる。よく見ると張々だ。陳宮とは不仲なのだろうか……

「お仕事はいいのですか？」

「……次はお昼過ぎから」

「あ、昼食ですか。いいところはありますか？　セキトたちのご飯

は用意してあるのですが私は準備する余裕がなくて」

「……肉まん、おいしい」

そう言って呂布が指さすのは、軒先に湯気を噴き出す蒸籠が所狭しと並べられた屋台。どうも点心のたぐいを専門にしている店らしい。

余談ではあるが、肉まんとは日本語名称で中国語名称は包子（パオズ）のはずである。本当にどうなっているんだろうか。

「？　どうした？」

「あ、なんでもないですよ。肉まんもいいですね。まだだったらご一緒しません？」

「する」

何となく予想はついていたが、もちろん即答である。

「でも、おなかいっぱい食べられるほど持ってない」

「私が多少多めにもっているので大丈夫ですよ。それで食べましょう？」

「……いいの？」

「元はといえば呂布殿に雇ってもらえているからこうしているのです。それに寝室に三食付きなんですよ？　あまりお金を使うところがないんです。主へのお礼ってことで受け取って下さい」

「でも……」

「おじさーん。肉まん一かごー」

冬彌が声を掛けると、ちょうど蒸し上がったところだったのか一段まるまるこちらによこしてきた。

何とも豪快なおじさんである。

「冷めないうちに食べましょう？」

「……うん」

さすがに目の前に食べ物があるのに食べないという選択はできなかったようで、両手で肉まんをつかみ口に運んでいる。

しかし手が止まらない。口に運んだと思ったらまた手に取っている。もちろん其の手にとっていたはずのものは口の中にあるわけで。

「りょ、呂布殿。もう少しゆっくり食べた方が……」

「ん？　おおひいほのはひっはいはえる」

「……もう食べてからでいいです」

「ん」

呂布一人でこのペースだ。蒸籠一段なんて足りるわけもなく……

「……蒸籠五段ですか」

「腹八分……」

「これでですかっ！！」

冬彌も食べた。むろん食べた。しかし、蒸籠四段プラスアルファは呂布が食べた。然も胃の部分はちっとも膨らんではいない。

財布の中身が減った分、おなかが膨れていないと割に合わないと思うのだった。

「鉄拐、午後からもお仕事あるからセキトたち宜しく」

「……わかりました」

呂布はものすごくいい笑顔だった。

「……鉄拐は？」

「散歩が終わったら夕食の準備ですよ」

「すごく楽しみ」

冬彌が作る料理となれば、当然漁師飯であったりぶつ切りにしたものをよく使うまかないのようなものが多いのだが、意外にも好評である。幸いにも川魚や干物はたくさんあったので呂家では魚がブームになっている。

できれば味噌がほしかったのだが、日本の味ではなかった。さらには大豆はあれども醤油もない。これではいい味が出せないと両者ともに作成中である。酒はやたら出回っていたので、陳宮にお願いをして酒蔵に麹を分けてもらい、どうにか作ることができた。現在は管理の下に熟成している。完成するまでもうしばらくかかるだろう。

さすがに大量に作るのは無理なので、木枠に少々作った程度であるが。

「知らない味の料理、また食べたい」

「あと二月は待ってもらわないと。味噌の味が落ち着きませんよ」

「……残念」

「できたらちゃんと食べてもらいますから」

「……うん。セキト、また後で」

若干どころかものすごい残念そうに城に向かって歩いて行った。

毎日のことだからいい加減慣れたと言えばそうなのだが、うんざりだとも思ってしまう。

「なあセキト、おまえの飼い主は何で毎回聞くんだろうな？」

だがセキトからはもちろん、そのほかの犬たちからもその答えは返ってこなかった。

町の外まで行ってそこでドッグランのようなことをしてのんびりと過ごす。犬と猫の場合はそれですむのだが、熊やパンダの場合城の裏まで回らないといけないので大変だ。

一通り遊んだところで自由にさせ、冬彌は木陰に入って休憩であ

る。
いつもなら夕方手前くらいまでそのまま休憩するのだが、
「セキト〜、そろそろ帰らないとまずいんだけど……」
「……ぴゅ〜〜〜るるぅ」
今日に限っては冬彌の腕を枕にしてセキトが気持ちよさそうに寝ていた。ちなみに張々も足を抱き枕にして寝ている。
「起きてくれ〜……」
「……すぴゅ〜〜」
二匹とも起きる気配が全くない。そろそろ夕方なので市場によって帰らないと食事の準備ができない。そうなると当然呂布と陳宮の両名から盛大にしかられるわけで……
「セ〜キト〜……」
ゆさゆさ揺するとようやく目をうっすら開ける。だが起こされたためか半分しか開いていない。

「……わふっ」

「晩飯の買い出しがあるんだ。起きてくれ～」

そこまで言うとようやく仕方がないなぁといった様子で起き上がった。ついでだろうか張々も起こしてくれる。

「ありがとうな」

「わんっ」

頭をなでてやると気持ちよさそうにすり寄ってくる。

そうこうしていると他の犬たちも集まってきた。

「じゃあそろそろ帰ろうか」

「わふっ」

「わんっ」

今市場に向かえばちょうど割引などをしてくれる時間だろう。

門をくぐってすぐのところで開かれている市は、この時間になると人でごった返していた。

大概の人は商店で買い物するのだが、呂家となると動物たちの餌

や呂布本人の食事事情を考えるととても足りない。なのでここで買いだめをして足りない部分を商店で購入するという形をとっていた。

「今日はどれが安いかな？」

「お～、呂布様んとこの兄ちゃん。いつもよりちょっと遅いねー」

「昼寝してしちゃってね。今日はどれがおすすめ？」

「う～ん。うちは魚かね？　いい干物入ってるよ」

「いいところ二十枚くらいもらおうかな？」

「おうよ。あとは何が入り用だ？」

「野菜かな？　一通りまとめて」

「……うちには今将軍様に食べてもらえそうな野菜はねぇな。焦さんとこならまだあるんじゃねえか？」

「じゃあそっち行ってみるよ。これ、干物のお代」

「まいど」

それからは野菜の注文もすみ、一通りの買い物が終わる。
さすがに全部運ぶことはできないので、量の多い野菜や肉は運び込んでもらうようお願いしてある。そのため、現在持っているのは最初に買った魚の干物と運良く売れていた川魚数匹である。

「今日は煮付けかな～？」

泥臭いことが多い川魚は酒を使って煮るに限ると思っている冬彌。そのことをたまたま食べに来ていた張遼に話したため、酒は飲むものだと説教をされた後つまみに料理を作らされた。

ちなみに、そのつまみにも酒を使っていたことは本人には内緒である。

「さて、そろそろ仕込みをしないと間に合わないだろうなぁ。帰るか……ん？」

ちょうど市場の出口あたりになぜかできている人だかり。時間を考えれば市場の中にできるのは不思議でも何でもない。しかし市場の出口ともなるとさすがに何かあったと考えるべきだろう。

「すいませーん」

遠巻きに近づくのがやっとで奥の方は見えないがあまりよろしくない雰囲気らしい。ヤジの飛ばし方がやけに荒々しかった。

「あん？　兄ちゃんどこの人？」

「先日から呂布様の下で働いている小間使いですよ。それより何かあったんですか？」

「何もあったもんじゃねえよ。今盗賊が女の子を人質にして金よこせだの馬よこせだの騒いでるんだよ」

なるほど、それならこの雑然とした様子にも頷ける。

「隙をみてどうにかできないんですか？」

「それがなぁ。何でか知らねぇけどよ、兵士たちが若干おびえ気味なんだよ。普段はねぇって言うのに」

「それはどういう――――」

「へ、へぅ――――――――！！」

そこまで聞いたときだった。どこかでいたことのあるような、けれど絶対そうではないだろうと思いたくなる叫び声が耳に飛び込んできた。

「月（ユェ）えぇぇぇぇぇ！！」

「おまえ、月にけがさせたらどうなるかわかっとるんやろうな！！」

普段からお世話になることの多いさらしを巻いた女性、そしてその横には普段顔をほとんど見ない重役の女の子が真剣な顔をしてなぜか道の端の方をにらみつけている。

「さっさと持ってこいっつってんだろぉぉがぁぁぁぁ！！」

「さっさと離せ言うてんのがわからんのか！！　傷物にしてみぃ、お天道様に二度と顔向けできんようにしたらぁぁぁ！！」

「詠（エィ）ちゃーん！」

「兵士たちはなにやってるの！？」

そこには見間違えようもない、つい先日見たはずの太守様が目を白黒させながら捕まっていた。それも刃物を突きつけられているという異常も異常の事態で。

第五話　この時代に犯罪がないはずがないわけで（後書き）

遅くなって申し訳ありません……

難産でした……

ここまで書きたいと思って書いているとその手前で止まること数回。そこまで来るとそこから筆がのって書き足すこと数回。うまいところで切れたような気はしませんがこのあたりで……

なお、一刀くんアンケートは続行中ですw

ちなみに出すなという意見は今のところゼロです。意外と人気者ですね。一刀くん。

第六話　事件の解決なんて一般人がほいほいできるわけもなく（前書き）

二月三日、節分でございます。暦の上では今日から春……
寒すぎです。雪がまだ積もっております。

さて、今までの更新は午前０時に行っておりましたが、載せきれないところが微妙にできてしまうので時間を遅らせます。まあだいたいこのあたりだと思って下さいｗ

第六話　事件の解決なんて一般人がほいほいできるわけもなく

あまりにも突然の出来事に呆然と立ち尽くす冬彌。事態は硬直しているようでそんな放心状態から我に返っても時間が止まっていたかのように何も変わっていなかった。

「準備はまだかぁぁぁぁぁ！」

「くっ……」

「金ならともかく馬がそんなに早く準備できるわけないやろが！！」

改めて眺めてみると、いつもの格好で油断なく槍を構える張遼。悔しそうににらみつける賈？。もはや半分どころかしっかり泣いてしまっている董卓。董卓や賈？はあの装飾過多の服ではなくもっと質素な服なのだが、それでも董卓のあの独特の悲鳴は間違えようがなかった。

刃物を突きつけられ、何が起こっているのかも理解の範疇にはないらしく目を白黒させている。

「くっ……どうすれば……」

おろおろしている賈？のところに知り合いを見つけたと尻尾を振るセキトがいつの間にかすり寄る。

「セ、セキト！？」

何でこんなところにといいたいのだろうが董卓のことが心配なのだろう。驚きはしたがそれだけで、すぐに視線を董卓の方向に戻した。

何となくその意味を悟ったのだろうセキト、張々たちに合図を送ると盗賊に向かって唸りだした。

「セキト、今はだめだ。頼むから」

「ん？　ああ、恋（レン）とこの。今かまってやる余裕はないんよ。下がっててくれんか？」

張遼もだいぶ殺気立っている。町人のほとんどは小さな女の子を人質にする盗賊への怒りだろうが、賈？や張遼のそれは比較にならないほどの怒りと殺気をはらんでいた。

「一瞬でええから隙ができんかな……うちやったらどうにかなんのに……」

どうやら張遼には起死回生の案があるようだった。今の口ぶりからするにそのために必要な一手が足りないのだろう。

向こうは何かできそうな相手には常に注意を払っており、よほど突拍子のないことでなければ注意がそれたりはしない。そう確信させるほど鬼気迫っていた。

冬彌にはやろうと思えば使える手段はある。しかしそれは今まで練習も何もしたことがないし、できると言うことがわかっているものでしかない。

「さっさとしろや！！」

「詠ちゃーん……」

「月っ！」

「おんどりゃ離さんかい！！」

だがこのままではしびれを切らした人間が何をするかわからない。そうなったときに董卓がどうなるか、それは想像に難くないことだろう。

知り合いである人間が目の前でそんなことになってしまうのはどんな相手であろうといい気分ではない。そう思うのが人である。

それは冬彌も同じで、つまり冬彌にはもはや選択の余地はないわけで、

「……張遼さん」

「……なんや？」

こそっと話しかけると、意図を察してくれたのだろう目線をずらすことなくぼそっと返してくれた。

「今からどうにかして隙を作ります。うまくいけば困惑させられるかと」

「うまくいく保証はあるんか？　下手な刺激をするよりこのまま待った方がええんやないか？」

「このままだとしびれを切らさないとも限りませんし、董卓様の体力も持ちません。一瞬の隙で十分なら大丈夫だと思います」

「……ホンマやな？」

「……必ず」

「その言葉忘れんなや」

張遼も下手に時間をかけるのはまずいと思っていたのだろう。賈？も見守ることができない今、しぶしぶながら了承する。

ここで冬彌がとる方法というのは普通ならできるはずもないアレである。というよりそのくらい予想の裏を行くことでないと打開のしようがない。

「次に剣が董卓様から離れたときが合図です。いいですか？」

「……わかった」

強盗へとクラスチェンジを果たした元盗賊はそろそろ限界だったのだろう。

「てめぇら、さっさと持って――」

刃物を野次馬たちに向かって突きつける。

「今だっ――」

冬彌が声を上げると突然強盗の口周りに水が現れ、ちょうど息を吸い込むところだったのかむせ返る。

何が起こったのかわからない強盗は期間に入った水をはき出そうと必死だ。だがその絶好のタイミングを張遼が逃すはずもない。

「うぉりゃー！！」

張遼が神速を以てつきだした槍が強盗の剣をはじき飛ばす。

「なっ――」

「今よ！　月の救出と強盗の取り押さを！！」

そこからの行動は早かった。張遼は勢いそのままに強盗を取り押さえ、賈？は周りにいた兵士に指示を出してこの場の鎮圧と月の保護をさせる。

その間わずか数分。十分な大捕物だった。

「月ぇぇぇ！！」

「詠ちゃん！！」

顔をくしゃくしゃにして喜ぶ賈？。本当に安心したのだろう。しゃくりを上げている様だ。董卓も目尻に涙をためて賈？を慰めていた。

「月！　大事ないか？」

「霞さんも、本当にありがとうございます」

「うちは主を守っただけや。こんなことで褒めんといて」

「それでもありがとうございます」
「それなら鉄拐のやつを褒めたってや。うちはあいつの案に乗っかっただけやし」
「鉄拐さん？」
「恋のとこにおったやろ？　世話係の」
「どこにおられるんですか？」
「……？　変やな。ついさっきまでそこにおったんやけど」

探してみるが人混みの中に彼の姿はない。張遼に比べ慎重の低い董卓からすればなおのこと見つけられるはずがなかった。

そのときちょうど騒動を収め終わったのだろう。兵士の何人かが三人の元にやってきた。

「ご無事で何よりです」
「まあな。助けてくれたんもあったし。それで、被害とかはどうなんや？」
「はっ！　けが人はおらず、また金銭的被害もありません」
「そか。なら実質的な被害は月のやつだけか」

「だと思われます」

「思われますってどういうこと？」

ようやく落ち着いたのだろう。目を若干赤くした賈？が訪ねる。自身と張遼の間に董卓をおいているのはさすがと言える。

「男が一人、近くで倒れておりました。我々が付近を固めていたのでこの件以前に倒れていたと言うことはないようです」

「……誰かわかるか？」

「いえ。町人に話を聞きましたが名前を覚えている者はいないようです」

「そうか……」

家族がいるのならば連絡しなければならないし、もしならず者なら牢屋に放り込むことになる。その判断材料がないというのは為政者側からすれば非常に困ることだった。

「んで、その男はいまどこや？」

事件の関係性が疑われる場合、通常ならば城の一室で治療を受け

ることになる。もちろん相手がどんな人間かわからない以上客間などと言ういい場所ではないのだが。

「それがですね……」

なにやら言いにくそうな兵士。

「何かあったんか？」

「問題らしい問題ではないのですが、犬が群がってきまして……」

どこにいたのかわからないが、倒れた男の周りにものすごい数の犬が集まっていてまともに移動させられないという。

「犬ぅ？　なんや、恋みたいなやつやな」

「そうね。まさか恋以外にそんなに慕われるわけが……」

そこで何かに気づいたように賈？が張遼を見る。

「霞、ボクが言いたいことわかる？」

「うちも言おうとしてたところや」

「？　どうされたんですか？」

それまで様子を見ていた董卓がわからないといった顔で二人を見上げる。

「どこにおるんや？」

「犬たちが離れなかったので近くの倉庫に運び入れましたが」

「案内してちょうだい。月はごめんけど先に帰っててくれない？」

「私も行く。だってそこにいるのは私を助けてくれた人なんでしょ？」

「可能性の話やで？　それに月も疲れてるやろ？　それだったら戻って休んだ方がええんとちゃう？」

「こっちの方が気になりますし。たとえ違ったとしても迷惑をかけたなら謝らないと」

「はぁ。わかったわ。じゃあ改めて案内して」

「は、はい！！」

兵士は幾分慌てたようだったが、張遼にさっさとしろと言われるとこちらですと人混みをかき分けるようにして先導した。

「ここです」

兵士が案内したのは大通りから一本入ったところにある倉庫。普段なら一杯になっているであろう倉庫は半分ほどしか物がない。

犬たちはそのほとんどが倉庫の周りをうろうろし、数匹が中で心配そうに顔をのぞき込んでいた。

「やっぱりやな」

「思った通りね。おいでセキト…」

「わんっ！」

賈？が呼んだのは間違いなく彼女の部下、呂布が飼っている犬だった。

倉庫の中からゆっくり出てくると賈？にじゃれつく。しっぽを振ってうれしそうだ。

「セキトがおるっちゅうことは、ここにいる犬は全部恋のとこのか？」

「たぶんね。そうじゃないとこんなことありえないでしょ」

ため息混じりにこぼす賈?。確かに呂布以外にこんなことができるとは考えにくかった。

「じゃあここにいるのはあいつで間違いないんやろな」

「?　詠ちゃんも霞さんもここにいるのが誰かわかってて来たの?」

「まあ……そうやな。たぶんあいつなんやろなーとは思っとったで?」

「霞が話してたしね。何の挨拶もないとは思えないわ」

「でも恋さんは今調練じゃなかった?」

呂布には午後から新兵の訓練があったはずだ。そして呂布が出るなら当然陳宮もそれについて行く。今城には華雄くらいしかいないはずであった。

「恋がこんなところにおるわけないやろ?　ねねがおらんのに」

「そういうこと。それでもセキトたちが集まるとしたら……」

「?」

ここまで言っても董卓にはわからないようだ。

「ま、このメンツならうちが連れて行くしかないやろ？」

案内をした兵士はまだ仕事があったのだろう。ここについて早々に姿を消していた。

ここにいるのは張遼、賈？、そして董卓の三人だけだ。

「そうね。客室でかまわないわ。目が覚めるまで寝かせておいて」

「わかった」

「？　詠ちゃん。知らない人にお城の部屋はだめだよ？」

「大丈夫よ。っていうかまだわからないの？」

「う、うん……」

「ま、すぐわかるわよ。霞に連れて行ってもらうし」

そう言うと賈？はセキトを抱き上げる。

セキトは遊んでもらえると思ったのか、賈？の顔をなめ始めた。

「ちょ……セキト……やめ……」

「セキト、だめだよ？」

董卓にたしなめられるとしおらしく頭を擡(もた)げるセキト。だが方に頭を載せたその姿はくつろぐことにしたようにしか見えない。

「んん？　詠はセキトを背負って帰るんか？」

ちょうどそのとき何かを担いだ張遼が出てきた。

「そんなわけないでしょ！　で、やっぱりそうだった？」

「ほれ。間違いないやろ？」

張遼がわざわざ背中側を向け、担いでいる人を確認させる。

「ええ！？　鉄拐さん！？」

「やっぱりね。戻ったら医者も呼ばないといけないわね」

董卓は全く想像しなかったのだろう。張遼が抱えて出てきたのは李鉄拐その人であった。

「んじゃ、護衛もかねて一緒にもどろか」

「えっ？　えっ？」

「帰ったら説明してあげるから」

「月はお礼いわなあかんしな」

張遼は二人の先導をするように歩き出した。未だ混乱を隠せない董卓の背中を押して賈？が続く。

その後、冬彌が目覚めるのに三日。ちゃんと会話ができるようになるまでさらに三日かかった。

目覚めてからは董卓やら張遼やらに根掘り葉掘り聞き出され、呂布や陳宮には飯を作れと迫られる。そんな話はまた後日ーーーー

第六話　事件の解決なんて一般人がほいほいできるわけもなく（後書き）

一刀くんアンケート実施中ｗ
今の感じでは蜀か呉？　さてさて、一月を切りましたがどうなることやらｗ

同数であった場合は作者の独断と偏見で決めさせていただきます。
あらかじめご了承下さい。

第七話　できることは僅かな抵抗。そして必要な楔

目が覚めると、いつぞやの天井だった。暗闇の中、こよりの明かりだけが揺らめいて部屋の中を赤く染め上げている。

もう時間は相当遅いのだろう。外の闇はまるで墨をこぼしたかのように何も目に映らない。

月どころか星すら見えない夜。空を覆う雲は分厚く、しばらくはこのままだろうと訳もなく確信させた。

「……ん～。てっかい……ごはん」

ふと冬彌が顔を上げると、そこには炎よりもなお紅い髪の少女が顔をこちらに向けて熟睡中だった。珍しいことにその他には誰もいない。できる限りはいつも一緒にいるあの子犬のような少女がいなかった。

「珍しいこともあるんだなぁ」

頭をなでると「んふぅ……」と気持ちよさそうな声を上げた。

疲れていたのだろうか。しばらく続けていても目を覚まそうとする様子もなく規則正しく小さな呼吸を続けるのだった。

虫の声と僅かな呼吸の音だけが響く部屋の中はそれだけで十分一枚の絵画になり得た。

「恋(レン)〜。いるの〜？」

「おられますよ。ぐっすり寝ておられるので静かにお願いします」

「て、鉄拐！？　起きたの！？」

慌てたように扉から顔をのぞかせたのは文官筆頭の賈？、その人だった。

「まあこの通り、起き上がるくらいだったら問題ないようです。この状態なのでこれ以上のことはわかりませんが」

「そ、そうね……」

だがなぜかばつの悪そうな賈？。目を冬彌に向けようとはしない。

「ーーあ、鉄拐。起きた」

「はい。今のところ身体の異常はないようです。元気ですよ」

「よかったーー」

賈？も先ほど大声を上げていたし、扉の開き方も乱暴だった。起

きても仕方がない。冬彌が目を覚ました呂布に笑いかけると呂布もつられるようにふわっと笑いかける。

「賈？殿もありがとうございます。心配をかけてしまったようですね」

「えー……あー……うん。元気みたいでよかったわ」

そう言ってすぐに冬彌から顔をそらす。先ほどと同じだった。

「……？　なんでこちらを向かれないんですか？」

「え！？　いや、悪いことしたかな～って……」

一瞬だけ視線を冬彌の方にやるが、やはり苦虫をかみしめるような顔をしてすぐに元の位置に戻してしまう。

それどころかゆっくりと冬彌との距離が開いているような……

「だから何がです？」

「ふ、二人の邪魔をしたことは謝るから！　そそそ、それじゃあね」

「「？」」

勢いよく扉を閉めるとばたばたと足音が遠ざかっていった。

冬彌が目を覚ましたからその報告にでも行くのだろうか。

「……ねむい」

「まだ真夜中ですから。戻ってお休みになられた方がいいと思います」

「鉄拐と寝る」

「いや……ですからね……？」

そこでふと思い出すのは先日三人で寝たときだ。寝るときは陳宮を間に挟んでの川の字だったはずである。しかし寝相が悪かったのだろう陳宮は、ベッドの隅っこの方で上半身をベッドから出して逆さまの状態。呂布は体を半分丸めながら冬彌に抱きついていた。冬彌はと言えば寝返りを打って反対側を向いてはいたが、それはつまり後ろ側から呂布に抱きつかれているため目を覚ましていようがまともに動けない状態となっていた。

それはつまり呂布より先に目を覚ました陳宮から腹部への陳宮キックを受けるわけで……

何が言いたいのかと言えば、冬彌からすれば何のいい思い出もないのである。いや、呂布に抱きつかれていたというのは確かにいい思いをしたのかもしれない。陳宮キックさえなければ。

「……だめ？」

まだ半分寝ぼけているのだろう。潤んでいる瞳の中でこよりの炎が揺れていた。

ここでこれを拒否できる男がいるなら見てみたい。

むろん冬彌も男なのだ。

「……わかりましたよ」

心が折れた。

対照的に呂布の方は顔を輝かせるともぞもぞと布団に潜り込む。

そしてひょこっと冬彌のすぐ隣に顔を出した。

「あったかい――」

「よかったですね……」

冬彌に返せる言葉はそれくらいだ。抵抗する気持ちがかけらも残っていないのに気の利いた言葉を返せるはずがなかった。

「今日は鉄拐と一緒」

「そうですね。陳宮殿はいませんからね……」

「うん……恋が独り占め」

「っ！？」

考えないようにしていたこと。それはこの部屋にいるのが呂布と冬彌だけで、然もその場がベッドの上であることだ。

（無心になれ！　無心になるんだ！　煩悩退散！！）

「鉄拐はあったかい？」

「え、ええ……」

「よかった。じゃあ寝る」

「……はい」

そう言うと呂布はすぐに寝息を立て始めた。

後に残るのはいろいろな意味で口にはだせない感情が渦巻く少年一人である。

「……寝よう」

そして少年は思考を放棄する。

「ちーーーー」

目覚めはあまりよくなかった。腕がしびれているし、背中は寝汗でじとっとしている。

腕の感覚は残っているものの。少しの間、まともに動きそうになかった。

「ーーーーう」

そして窓の外を見上げると既に太陽が昇っていて、もうそろそろ仕事の時間だろうと思われた。もっとも冬彌は朝ご飯からが仕事なので十分どころでなく遅刻なのだが。

せめて昼食くらいはしっかり作ろう。そう心に決めて体を起こした。

「……は？」

まず目にしたのは飛び上がる緑色。

「きーーーーーっく！！」

冬彌の腹部に突き刺さるのは緑の弾丸。回転も加えられたそれは容赦なく冬彌を壁にたたきつけた。

「げほっ！？ごほっ――」

「こここここ、このケダモノめ！？　恋殿を傷物にしてくれやがりましたな！！」

ベッドの上にきれいに着地し、冬彌に向けてまるで探偵かの如く指を突きつける陳宮。その後ろで呂布はすやすやと熟睡中だ。むろんのこと服を着ている。

「れ、恋殿。起きて下され。この野獣の下から逃げ出すのです！」

「ん～……もすこしだけ……」

「ああ～。かわゆい……かわゆいですぞ、恋殿。このままねねがお持ち帰りして……」

「欲望がだだ漏れですよ。陳宮殿」

「――はっ！？　いやこれは違うのですぞ。ただ恋殿がかわいいことを褒めているのであって……」

「そうですね。呂布殿には癒されます。しかし先ほどのきっくはその寝ている呂布殿を起こしかねませんでした。そして私も凄く痛かったんです。謝って下さい」

「も、申し訳ないのです――――ってなんでねねが鉄拐に謝らなければならないのですか！？」

「謝罪はできる大人のステータスです。よかったですね」

「むきーーーーー！！」

「ん～……ねね、うるさい……」

さすがに騒ぎすぎたのだろう。眠そうな目をこすりながら呂布が起き上がった。

「恋殿～……それはひどいのです～」

「まあもうこんな時間ですしね。陳宮殿が起こして正解だったと思いますよ？」

「？」

呂布は未だに理解できない、というよりも眠気から解放されないのだろう。午前の仕事の時間だと言っても首をかしげていた。

「陳宮殿、仕事の方は大丈夫なんですか？」

「ふん……鉄拐が起きたから今日の午前中は会議なのです。というより鉄拐の事情聴取をすることになっているのです」

「事情聴取、ですか？」

「詠（エイ）も霞（シア）もどうやって事件が解決したのかよくわかっていないのです。だったら本人が起きたのだから聞けばいい、とそういう話なのです」

「なるほど……で、呂布殿はなぜ呼ばれているんです？」

「雇い主だからなのですよ。普段の様子も聞きたいと詠が言っているから仕方ないのです」

「なるほど。呂布殿もわかりましたか？」

「……なんとなく」

まだ寝ぼけているのか、目は半分閉じたままだ。

この状態で何となくでも理解できたのだから御の字なのかもしれない。

「場所はこの前食事をした部屋なのです。さっさと行くのですよ」
「わかりましたから引っ張らないで下さい」
「もうみんな待っているからそんな悠長なことは言ってられないのです」

慎重の低い陳宮が急いだところで二人にとっては早足程度でしかないのだが、寝惚け眼の呂布には少々きつそうだった。
つく頃にはどうにか呂布の頭もしっかりしていたのだが、幸せな時間を邪魔されたと思ったの少々不機嫌そうな顔になっていた。

「この前は助けて下さってありがとうございます」
「月(ユェ)も無事やったし鉄拐のおかげでけが人らしいけが人もおらんかったしな。ホンマ助かったわ」

この前と同じようにいすに座っている董卓をはじめとする首脳陣。その中に今日は華雄もいた。仮にも主君にあった出来事の報告なのだからいてもおかしくはない。
冬彌はというと前回の食事の時とは違い、今回は董卓対面である一番下座に座っていた。

「ご無事で何よりです」

「それは本当に感謝しているけど、今回呼ばれた理由はわかってるわよね？」

「……どうやって助けたのか、ですね？」

「そう。ボクもあの場所にいたけど突然男がむせたようにしか見えなかった。実際にむせたんだろうけど、普通のむせ方じゃあんなに取り乱すとは思えない。それに霞に合図を送ったって聞いてるけど」

「うちは鉄拐の合図を受け取って飛び出しただけやしな。まさかその瞬間にむせて視線を逸らすなんて思ってもみんかった」

なにかあるんだろう？　その場にいた人間の目は雄弁に語っていた。

「……ごまかし切れそうにないですね。話すのはかまいませんがいくつか条件があります。よろしいですか？」

「――っ！？　ふざけるな！　貴様がどうやって董卓様をお助けしたのか知らんが怪しいことは明白だ！　そもそも本当に貴様が助けたのかすら怪しいんだぞ！　その首ここで切り落とされたいか！？」

立ち上がって叫ぶ華雄。それは仕方がないことだろう。自分がいないうちに上がり込んでいた客、それもなんの情報もない相手が突

然こんな場所で感謝されているのだから疑心暗鬼に駆られて当然だった。

「ちょっとまちぃな。条件を出すっちゅうことは内容がそれほどっちゅうことなんやろ？　それにのめる条件かどうかは聞いてからでも遅くない。まさか条件を聞いたら呑まなアカンなんてことはないやろ……なあ鉄拐？」

言っていることは冬彌の擁護だが、目は全くと言っていいほど穏やかではなかった。まさに獣のそれでうかつなことをしゃべれば切り伏せられることは容易に想像できた。

「それは大丈夫です。条件は互いに等価であるべきだと思います」

「ならうちからはこれ以上聞くことはない。あとは条件を聞いてからや」

「……ボクもそれでかまわないわ」

「恋は鉄拐を信じる」

「少なくともこう言っているのなら信じても問題はないはずなのです」

「私は助けられた側ですし、話して下さるなら喜んで受け入れます」

「……」

「あとは華雄殿だけですが……」

周りの反応を聞いても華雄は目をつぶったまま何もしゃべらなかった。その間他の人間が何かを口に出すことはできず、ただただ華雄の決断を待つことになる。

「……いいだろう。その条件とやらを話してみろ」

口を開くまで、優に五分はかかった。

「ありがとうございます。条件は他言無用であること、仮に話を周りに広めることがいい影響を与えることがあったとしてもです。次にそちらの態度が変わらないこと。別にクビにするとかはかまいませんが、犯罪者扱いや逆に神様扱いすることもです。まあこれは極論ですが」

「変な話ね。他言無用である以上、二つ目はあまり意味がないと思うんだけど」

「……それだけの話だと思って下さい」

賈？の疑問はもっともなことである。他言無用の話である以上、そういうことがあったと気取られてはいけないのだ。つまり、そう約束させられた側はなにもなかったように振る舞う必要があるから

である。

「そんな話なのかはこっちが聞いてから判断することなのです」

「せやな。うちらの受け取り方はうちらにしかわからん。それでもそんな念を押す必要があるんか？」

「……それほどのことです」

陳宮や張遼からさらに反論があるが冬彌はそれを一蹴し、ゆっくりと地面に雨が染み入るように話し始めた――

第七話　できることは僅かな抵抗。そして必要な楔（後書き）

遅くなって申し訳ありません……
忙しいのです……
ですががんばって書くのでどうかおつきあい下さいｍ（＿＿）ｍ

なお、一刀くんアンケートは目標のところまで続かなかったので引き続き募集ということにします。近くなってきたら締め切りを改めて設けたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

ー改めてアンケート選択肢ー

1．出さない方がいい。（作者がんばれ！　もっとがんばれ！　おまえならできるだろおぉぉぉぉ！！　難易度不明）

2．出してもいいんじゃね？　一刀くん、魏の馬車馬。つぶれるまで仕事をさせろ！（ぶっちゃけこれは結構書いている人が多いので難易度高いよ？）

3．出した方がおもしろいよｗ　一刀くん、呉のご意見番。たまにしかいいこと言いませんｗ（オリ主ここのほうがいいんじゃね？　でもそれも多いよねー。難易度そこそこ？）

4．出せよ。出すんだろ？　一刀くん、蜀のお人形。いるだけ（どこに？）で結構助かってますから（はっきり言ってここが一番種馬でへたれだよね？　ぶっつぶせ！！　難易度一刀くんの種馬度に依存）

以上、宜しくお願いします。

第八話　処遇、禍根を断つためにも処断すべし……ちょっと残った

その後、事情を話せるだけ話した冬彌は一度退出し、残りのメンバーだけで話し合うことになった。

だが当然その内容は即断するにはあまりにも突拍子もないことで、

「追放すればいいだろう！？」

「だからそんなわけにもいかんやろ」

「鉄拐の説明には矛盾がないしボクたちにはそれを否定する材料がない。だとするとそれを事実として受け入れるほかないわよ」

「目の前で実演されてしまった以上、信じないわけにも行かないのです」

「……鉄拐のこと信じる」

「少なくとも嘘をついているようには見えませんでしたよ？」

「嘘はついていないだろうけど、何か隠している感じではあったわ」

「今全部聞いたとしてそれを受け止めきれるかは甚だ疑問なのです」

「せやな。何しろ一言目から自分は仙人です、やからな……」

張遼が机に視線を落とすと、そこには水がなみなみと注がれた杯があった。ここには水差しもなければ桶があるわけではない。ただ水の入った杯だけがあるのだ。

「鉄拐本人が飲んで見せた以上、これはただの水と解釈して問題ないけどその取り出し方が、ね」

「楽しかった」

「恋(レン)はあいかわらずやな……」

「私も楽しかったですよ♪」

「董卓様まで……」

そう。目の前にある水は鉄拐が仙術で取り出して見せた物だった。球体として取り出したそれは案外本人の負担も小さいらしく、曲芸のようなこともしていた。

それを見た董卓、呂布は目をきらきらと輝かせ通常では起こり得ないことに見入っていた。他の四人も御多分に洩れていない。陳宮、賈?は憮然としながらも視線をそらさず、華雄は冬彌をにらみつけていた。張遼だけはなぜか酒がほしいとぼやいていたが……楽しんでいたのだろう。

「華雄は追放しろって言うけどな。まず雇い主は恋や。恋がやめろって言わん限りうちらにはそれをする権利がない。月(ユエ)やったら話は別やけど」

「私はそんなこと言いませんよ」

「な？」

「ではどうしろと言うのだ！　董卓様を思えばこそ……」

「だったら今は様子を見なさいよ」

「だが……」

「本人が仙人だというのは確かにうさんくさいですが、それについてどうこうしようとは思っていないようなのです」

「そう。だったら今まで通りで問題ないわ。こっちに不利益はないのだし」

「いざとなったら仙人が仕えているという噂が役に立つかも知れないのです」

「むう……」

「まあそれは本人の承諾が必要でしょうけど。持ち札が多いことに越したことはないわ」

「そんなわけで追い出すんは却下や。恋も気に入っとるし、うちもたいした理由もなく解雇っちゅうんは納得できん」

「むう……」

ここまで周りから言われては一将軍でしかない華雄には何を言うこともできない。

「だがこのままとどまるのであれば、兵士の一部に鉄拐のことが知られてしまっている今、何らかの形で内政に関わらせなければならないのではないか？」

「それは……そうなんだけど……」

華雄の反論ももっともだった。兵士たちには名前こそ知られていないものの、城に担ぎ込まれた男が董卓様を救ったらしいという噂が流れている。

それはすでに英雄視に近いところまで来ている上、一部の兵士たちには顔を知られてしまっている。故にこのまま何もなしというわけには行かなかった。

「内政は繊細な化け物。いきなりやらせてもうまくいくはずないのです」

「ねねの言うとおりだわ。確かに連絡だったり小間使いだったりなら使えるでしょうけど、それだけでは周囲が納得しない。いくらボクたちがこのくらいでいいと思っていてもそれだけはどうしようもないわ」

「見た感じ武器を扱えそうな感じでもないしなぁ……鍛えればそのうち使いモンになるかもしれんけど、そんな時間ないやろ」

「鉄拐の料理、おいしい」

呂布が目を輝かせて発言する。雇い主からの情報は貴重だ。少なくともここにいる誰よりも冬彌について知っているだろう。

「料理番にってこと？」

「腕に関しては少なくとも二番手、三番手にはなるくらいの味ではあるのです」

「だが、それはさすがに看過できんぞ。我々の口に運ぶ物なのだ。少なくとも私は賛成できん」

「そうなるともう信用の問題ね。ボクもすぐに、というのは反対だけれど」

「それになぁ……料理番っちゅうのは華がないで？　それやと周りは納得せんかもしれんやん」

「そうなると仕方ないわね……ボクの補佐でもしてもらいましょう」

苦渋の決断とばかりに賈？が唸る。

「大丈夫なんか？　仮にも宰相やろ？」

「見られてはまずい書類だってあるはずなのです」

「まあそうだけど、他に手がないわよ。ねねの下だと役不足。武術は今すぐ望めると思えないし、ならボクの下で小間使いさせるのが一番でしょ」

「役不足とは何ですか！？」

「立場が役不足ってことよ。一文官の下じゃどうしようもないでしょ？」

「それは……」

陳宮の立場は決して低くはない。文官筆頭は賈？であるが、次席、あるいはその次くらいの立場ではあるのだ。それはこの場にいることが何よりも証明しているだろう。

それでも今回の件は立場としての力が弱いのだ。いくら次席であろうとただの文官の下、これでは兵士をはじめとする市民から批判が殺到してもおかしくなかった。

「辞令は当人に知らせてから数日後。準備を考えると今日から一週間くらいが妥当でしょう」

「そんなもんやろ。辞令はねねが伝えてくれるやろうし」

「恋が伝える」

「ははは、主は恋やもんなー」

「……うん」

「ま、呂布がちゃんと伝えられるかどうかは甚だ疑問だがな」

「む……華雄、だまる」

「おもしろい……やるか？」

とたんに一触即発の空気が流れる。傍目にはただのけんかだが、当人たちにとってはそんな些細なことではないのである。こうなると同じ立場に立てる人間以外仲裁のしようがない。

それは、張遼である。

「二人ともやめーな、ここは会議場やで？　月もおるんや。けがでもしたらどうする？」

「す、すまなかった……」

「……ごめん」

「二人とも謝らないで下さい。自分の武に誇りを持っているのは知っていますから」

「せやけど限度ってもんがあるで。こんな場所でけんかされたらたまったもんやないっちゅうねん」

「本当ね。恋も華雄も、次からこういう場所でけんかしだしたら減俸するから」

「それはひどくないか？」

「……みんなのご飯」

「次からって言ってるでしょ！？　もうしなければそれでいいの。さて、これで会議はおしまい。あとなにかある？」

賈？が周りを見るが特に何かあるような様子ではない。

「じゃあ今回はこれで解散。みんな午前の仕事がまだあるだろうから早速取りかかるように」

この声を合図に、今回の会議はお開きとなる。

だが、歯車は決してそろっていない。足りぬのだ……

一方、会議場を追い出された冬彌は昼食までの僅かな時間を有意義に活かすため、いつものように市場を訪れていた。

小腹が空いたので鹹点心にかぶりつきつつ今日のおかずにいい材料はないかと物色していた。

市場に並ぶのは大根や白菜といった寒い地方でもよく育つ作物が主だ。ここのあたりで小麦や芋を見かけることはあっても米を見かけることは滅多にない。いい加減白いご飯が恋しくなってくる冬彌だが、見つけても高値がついていることが多いためなかなか手が出せないでいた。

「白飯と生魚が恋しい……」

川魚は泥臭く生で食べるのは難しい。内陸であるここでは海の魚は干物ですら高かった。

それでも懐かしい味恋しさに自分の給料で上乗せしてちょくちょく買ってはいるのだが、

「兄ちゃん、今日は買う物決まったかい？」

「まだなんですよ。昼食はともかく夕食の材料も決まってなくて」

声をかけてきたのはよく世話になっている魚屋の店主である。正確には魚介系の乾物を扱う店で、時々川魚も扱っていることがあるため、冬彌の中では魚屋で定着していた。

「ほう……そいつは大変だな。呂布将軍は大食漢で有名だから、昼食どころか夕食抜きになると暴れ出すんじゃないか？」

「そのくらいですめばいいんですけどね……」

昼食抜きですら耐えられるかどうかわからない呂布である。夕食すら出てこなかったらどうなるかわからない。あの陳宮がそれを許すとは思えないが。

「そうかい……あ、そうだ。実はこんなのがあるんだが……」

ごそごそと荷物をあさる店主。なかなか取り出すのに苦労しているようだが、そうして取り出したのは白黒模様が鮮やかな魚だった。縦に刻まれたストライプはどうやったのか寸分の狂いもなくまっすぐだった。

「川で打ち上げられてたんだが、なかなかおもしろい模様してるだろ？　高く売れないかと思って運んできたんだがよ、そろそろ限界なんだ。言い値でいいから引き取ってくれないか？」

それはとうてい川で見つかるはずもないもの。本来ならここから何千里と離れた場所に住むはずのものだ。

「おおおっちゃん……これをどこで……」

「ああ？　だから川だよ。仕入れた量が少なかったから川魚でも持ってこないと割に合わねぇんだ」

「おっちゃん、これはまだある？」

「あ？　ああ、まだあるよ。あと三匹か四匹か……黒っぽい水草が巻き付いてたが。しかし水につけてても日持ちしそうにないから捨てようと思ってるんだがな……」

「モッターイナイ……」

「は？」

おもわず冬彌が漏らした。よく見ればその巻き付いている水草とはだしを取るために必要なあれである。

そしてそれを捨てようとする行為は元漁師である冬彌にとっては許されざる蛮行であった。

「おっちゃん、それ全部もらう。三匹だろうと四匹だろうとかまわない。全部引き取る！！」

「あ、ああ……うちはどうせ売り物にならないからかまわないけどよ」

「ありがとうおっちゃん！！」

「これは将軍様の家にとどければいいのか？」

「いや、それじゃ持たないと思うから、ここで捌く！　包丁かしてくれ！」

冬彌の興奮は最高潮に達していた。普段ならあり得ない行動のオンパレードである。

これにはさすがに肝の据わったおっちゃんですら引き気味だった。さもありなん。

「今日はあら鍋……今日はあら鍋……」

「おいおい、兄ちゃん大丈夫か」

「だいじょぶだぁ……」

目が昏く光っている……きっと大丈夫だ。きっと……

まだ受け答えできているのだからそのうち落ち着くだろうと判断するおっちゃん。今の冬彌には関わりたくないのだろう。

「まずは三枚に下ろして身を薄く切り分ける。これは軽く湯ざらしにしておくと長持ちする。次に余っている兜と背骨の部分。これは火であぶって軽く焦げ目をつけておく……」

だが冬彌の様子はまるで変わらないまま調理が続けられていく。ここはいったいどこの地獄の釜なのだろうか。勘違いしてしまいかねないほどの真っ黒なオーラが吹き出している。

「おーい……兄ちゃん、若干営業妨害っぽいことになってるんだが……」

冬彌から出るオーラに当てられたのか、乾物屋を遠巻きに見る者はいても近寄ってみようという猛者はいなかった。

忘れがちではあるが冬彌は仮にも仙人である。そんなやつが真っ黒なオーラを振りまけば、こうなるのは当然の帰結であった。

「――ここで忘れてはならないのがこの昆布だ！　残念ながら完全に乾燥しているわけではないがいいだしが出ることは間違いない！　しっかりとだしを出すためにわざわざ火鍋（フォグオ）用の鍋を準備。これで時間をかけて煮出す！　その時間はなんと四半刻！　その間にあぶった兜やらの無駄なひれを取り去って……」

あまりの冬彌の様子に何事かと集まる人々。それが物珍しさと相まってなお人を引き寄せる。それは店を構える主人たちだけでなく警邏中の兵士たちまでを引き込み……

「ーーさあ！　ここで昆布を取ってこの魚の骨やら兜やらを！！」

完全に見世物を超えている。のぞき込んでいた兵士が、収拾がつかなくなると判断したのだろう。城の方に走っていく。

「だしが取れるまでの間、必要な白菜をはじめとする野菜類を……そこのおっちゃん！　あんた野菜売ってるだろ！？　白菜、椎茸、白ネギ、あと春菊をくれ！」

「あ、ああ……代金はーー」

「後から払うから今すぐもってこぉぉぉぉぉい！！」

「ひいいいぃぃ！」

この様子に周りに集まっていた野次馬もドン引きである。

おもしろいことを期待していたのだろうが、そこで繰り広げられているのはもはや越えてはならない一線を踏み越えてしまったナニカだった。

「将軍、こちらです！　我々の手には負えません！　どうにかして下さい！！」

さっき城に走っていった兵士が戻ってきたようである。

将軍というからには相当な人物を引っ張ってきたのだろう。

だが彼は間違いなく選択を間違えた。まず連れてきてはならない相手を連れてきてしまっていた。

「……鉄拐？」

「呂布殿か。もしかして止めに来たのですか？」

「……それがおしごと」

「止めてくれるなっ！」

事態の収拾を図ろうとする呂布に向かって冬彌は手を広げて待ったをかける。イヤに芝居がかっている気がするが、呂布は特に気にとめないし冬彌に至ってはトランスしっぱなしだ。

「……でもしごと」

「今しているの昼食の調理だっ！！」

……傍目からは決してそのようには見えない。妖術師の奇行にしか見えない。そして冬彌はやもするとそう認められかねない立場にあった。

「おひるごはん？」

昼食と聞いて呂布の目の色が変わる。時刻はちょうど正午を回ったところだろう。朝も会議だったりこんな騒動が起こったりしていつものように食事がとれていない呂布にとってそれはまさに青天の霹靂だった。

「そう。それも今まで食べたことのないようなものです！　今食べずしていつ食べる！！」

「……今しかない」

「その通りです！！」

「わかった。もうしばらく待つ」

これに驚いたのは周りの野次馬である。食事をだしにされた呂布と考えれば当然の帰結なのだが、しかし職務に忠実であるはずのあの呂布が折れたのだ。固まらずにはいられない。

「鉄拐、まだ……？」

「もう少しだけ待って下さい！　まだ味がしみこんでません！！」

「……おなかすいた」

「もうちょっとだけ待って下さい！」

……結局この騒動はもう一度兵士が城から走ってもどるまで続けられた。

そして解決したと言っても場所を移すだけにとどまったのである。

「……この鍋おいしい」

「懐かしい……この味、本当に懐かしい……」

「懐かしいんはええけどな、もうちょっと場所とか考えてくれへん？　うち、相当くたびれたで？」

「こんな味初めてです！」

「なかなかおいしいわね。今度お城の採譜にも加えてみようかな？」

「恋殿、こっちの肉も煮えておりますぞ」

「ちんきゅ、ありがと」

せっかくだから、と城にいた要職を集めてみたのだがどうしても華雄だけ見つからなかった。いてもそんなやつが作った物、と一蹴するかも知れないが……

「なんで華雄は見つからんねん……」

「ちょっとだけ残しておく？」

「その方がいいと思うな」

「もったいないのです！　華雄にくれてやるくらいなら恋殿にあげるのです！！」

「……おいしい」

「……ああ、懐かしい」

董卓や賈？の気遣いも思い出に浸る冬彌や食欲で動いている呂布には届かなかった。

後日、この話を聞いた華雄は、

「ふん！　そいつの作った料理なんか食えた物ではない！！」

そう言って特に気にしていない様子ではあったが、翌朝部屋の掃除に入った侍女が枕がぬれているのを不思議に思ったそうである。

それは次の日も同じであったとかそうではなかったとか。まことしやかに噂が流れるのである……

第八話　処遇、禍根を断つためにも処断すべし……ちょっと残った（後書き）

本当にお久しぶり。一月たってしまいました……

地震の影響で友人に連絡を取ったり義援金募集に走ったりとなかなか大変な三月でした。

ともあれ、どうにかこうにか一月に一回は更新できております。（すっごいぎりぎりだけどね！）

途中で頓挫することもあるかと思いますが、絶対に書き上げますので応援宜しくお願いします。

ではまた次話で。（次は幕間の予定）

Ｐ．Ｓ　一刀くんアンケートは幕間終了あたりで一旦終わろうと思います。今のところは蜀が圧倒的……

みんな！　そんなに彼が嫌いなのか！！？

閑話　呂家・果報は寝て待て……誘惑に負けた場合（前書き）

若干遅くなってしまい申し訳ありません……

さらに多少の改訂をするかもしれません。ぶっちゃけるとタイミング悪くＰＣが更新の再起動に入り……

そんな閑話をお届けします！（どんなだよ……

閑話　呂家・果報は寝て待て……誘惑に負けた場合

決心から三ヶ月。準備を始めて二ヶ月。ようやく成果が形として現れようとしていた。

来る日も来る日も首を長くして待ち続けていた呂布はもう限界で、そしてそんな姿を毎日見てきた陳宮も限界だった。

呂布は冬彌にまだかまだかと詰めより、陳宮は早くしろ早くしろと迫る。そんな日々だった。

「鉄拐、今日もまだ？」

「まだなのですか！？　いい加減食べさせるのです！」

「ん～……昨日見た感じだとまだなんですが……」

その言葉に目に見えて落ち込む呂布と必死で慰めようとする陳宮。だがそれはしかたのないことだ。理解はしているのだろう。呂布もうつむいているいるだけだし慰める言葉もどちらかというともう少しだからと励ます意味が強い。

「だったら今日も見てみるのです！　恋殿（レン）をこれ以上待たせるなんて……ねねには……ねねにはできないのです～！！」

「……」

今日は珍しくも二人して非番らしく、朝から陳宮がやってきていた。かいがいしく呂布の世話をするものの、冬彌からすれば食事をたかりに来ているようにしか思えない。

そんな世話の一環なのだろう。おいしいものが食べられると聞いた二人は、冬彌の前に来れば一言目はまだか、であった。

陳宮の雄叫びと同時に顔を上げる呂布。涙で濡れる瞳は冬彌の平常心をがりがりと削った。それはもうショベルカーの如くがりがり削った。

きっと心の中は露天掘りよろしく大穴があいているに違いない。

「わ、わかりましたよ……見てきます。ですけどまだだったら諦めて下さいね」

「……うん」

「さっさといくのです〜！！」

陳宮の興奮はまだ収まらないようだ。腕をぶんぶん振り回してにらみつける。

土間の隅にちょこんと置かれた小さな瓶（かめ）、それは冬彌が試行錯誤を繰り返した結果である。ちなみに最初に作った木枠の物は失敗した。内側が腐ってしまったのだ。よく考えれば当然の帰結だった。

ふたを取ってみると若干臭う。決して不快なものではないが長時間かいでいて気分がいいかと問われれば、否と答えるそんなニオイだった。

見た目だけでは判断がつかないくらいになったそれを指でほんの少しだけ取ってなめてみる。

「……」

「……」

「……おっ？」

「ど、どうなのです！？」

固唾をのんで見守っていた陳宮がさらに詰め寄る。

「食べられない状態ではないですが……もう少し待った方がいいかもしれません」

「……食べられる？」

「まあ……少しなら食べてみます？」

「食べる」

「ねねにもよこすのです！？」

あまり大量には作っていないため、試食といってもほんの少しだ。

それこそ指にのせる程度。

「……これは調味料なのですか？」

「……しょっぱいけどおいしい」

「調味料ですよ。味噌の一種です」

冬彌自身が覚えていることをゆっくりと説明し始めた。

「今回材料に使ったのは大豆です。栄養価が高いのと値段がそこまで高くなかったので今回はこれにしました。これで造った味噌は保存食としても十分な栄養と保存性があり、戦での長期携帯用の食料として用いられることもしばしば――」

「――もっと」

「はい？」

「おいしかった。もっと食べたい」

これにはうろたえるしかなかった。そもそも期間的に味噌ができあがるかどうかというぎりぎりである。少しくらいなら減っても大丈夫かも知れないが、元々小さな瓶（かめ）に作ったため量が全然ない。手のひらサイズの物である。

だというのに、ここでそんなに食べられてしまっては調味料とし

てほとんど使えなくなってしまう。

「……だめ？」

「で、ですからもう少し時間を……」

「……だめ？」

「鉄拐、答えるのです！！」

怒鳴る陳宮の目は拒否を許さないと雄弁に物語っていた。

「……じゃあ今日はこれを使って昼食を作ります。それで我慢して下さい」

「そういえばそろそろお昼時なのです」

「……おなかすいた」

お昼と聞いて呂布のおなかが鳴る。

「じゃあ……なす味噌でもつくりましょうか」

「なす……？」

「なすと言えばあの煮ても焼いても食えなさそうなあれのことですか？」

「いや、確かになす自身にはほとんど味がありませんが、油との相性は非常にいいんですよ？」

「むう……にわかには信じがたいのです」

「なんでもいい……おなかすいた」

呂布の空腹は限界のようである。少し前に朝食を食べてからほとんど動いていないのだが、泣くのに体力を使ったと言うことなのだろうか。

「わかりましたよ……豚挽肉となすでいいか」

どうも植物性の油は高価らしく、あまり見かけることがない。材料になりそうな物はいくつかあるので作ってみるのもいいかもしれない。ごまとか。

そんなわけで今回は豚の油だ。ちょっと臭うかも知れない……

「♪♪～？～。♪♪～？～」

ここに来てからはフライパンが使えない。というよりもない。故

に炒めるときは中華鍋となるのだが、これが思ったよりも使いやすかった。
重さはそこそこあるものの、慣れてしまえば取り回しやすい。今ではフライパンより絶対にこっちだ。
炒めて少しすると豚肉と油のにおいがあたりに立ちこめる。少々においが染みつくのは諦めるしかないだろう。
下味をつけて少量のお湯に溶かした味噌を鍋の縁からかけるとさらににおいがあたりに充満する。

「ぎゅるるる――」

呂布のビーストがシャウトした。それと同時に空腹に耐えかねたのかその場に倒れ込む。

「あわわ――恋殿――！！」
「……もう、まてない」
「まだなのですか――！！」

陳宮がラウドする。その姿は飼い犬が吠えているようにしか見えないが、今の冬彌はそれどころではない。早く作らなければ呂布の空腹ステップがさらに進んでしまう。そうなると食事（作りかけだけど）の目の前にいる敵（冬彌）は間違いなくばっさりとやられるだろう。

「豚肉はちゃんと火を通さないとだめなんですっ！」

「……まだ？」

「もう少し！　もう少しですぞ！！」

「……ま、だ？」

「呂布殿。もうちょっとですから――」

「……マ・ダ？」

呂布の声色が怪しくなっていく。普段の呂布ならおなかがすいてもすぐに食べられたのだろう。調理場に行けばそのまま食べられるものだってあるし、人がいれば作ってもらえばすぐなのだ。作っている間もこれでも食べていて下さい、と何かを渡されているに違いない。

しかし、この場にいるのは呂布、陳宮、そして冬彌のみ。呂布や陳宮はこの家のことを冬彌に任せているためどこにすぐに食べられるものがあるのか把握していない。そして冬彌は焦げ付きやすい味噌を使った料理をしている。

手が離せるわけがなかった。

「ち、陳宮殿。ご飯が炊いてあるので準備を手伝って下さい！！」

「わ、わかったのです！　お椀と皿どこですか！？」

「……ゴハン……オニク」

冬彌の位置からは真後ろになってしまうため確認できないが、きっと呂布の顔は見る者を凍り付かせるに違いない。そう思わせる声色だ。

かけずり回る陳宮が珍しくも呂布の周りに近寄ろうとしない。

「……イイ……ニオイ……」

「もうできましたよ！！」

「こ、こっちも準備できたのです！」

冬彌が料理にちゃんと火が通ったと判断したのと陳宮の準備が終わるのはほぼ同時であった。

机に並べられた料理は、なす味噌と普通の白ご飯、それに申し訳程度の味噌汁だった。

「とりあえず今用意できるのはこれだけです。呂布殿、さあどうぞ」

「……うん」

「よかったのです……」

いつもと変わらない様子に陳宮は心の底から安堵のため息をついていた。
空腹が限界を超えたとなれば呂布の新たな一面、それもあまりよろしくない一面が見えたことだろう。今回はそれをどうにかこうにか回避できたようだった。

とてもおいしそうに食べる呂布を眺めている陳宮は非常に満足そうだった。

「……鉄拐、おかわり」

「はい。わかりました」

「恋殿、何か足りない物はないのですか？」

「……おかず、もうちょっとほしい」

「わかったのです」

なぜか勝手に納得した陳宮が冬彌のそばに寄ってきて、まだ残っていたなす味噌をこれでもかと皿の上に盛りつける。

「え？　あ、陳宮殿？」

「恋殿ー。もってきたのですよー」

「……これ、とってもおいしい。ちんきゅ、ありがと」
「はうぁー！！　恋殿がああああ、ありがとうって――」
「……うん。うれしかった、ありがと」

これが陳宮へのとどめとなる。最近、冬彌をかまってばかりの呂布にいろいろとたまっていた陳宮はここぞとばかりに行動に出る。

「れっ、恋殿。味噌汁？のおかわりを持ってきたのです」
「……ん。ごはんも」
「わかりましたのです！！」
「あ、あの陳宮殿？」
「鉄拐！　もっと料理を作るのです！　これじゃ恋殿が満足しないのですよ！！」
「あ、はい。じゃあおひたしでも……」
「味噌を使うのですよ！！」
「もう三分の一も使いましたよ！」
「まだ十分あるではないですか！　もっと使うのです！！」

「ですから、これは未完成だと……」

「い・い・か・ら、とっとと作りやがるのです！！！」

「あーもう。わかりましたよっ！！」

何を言っても聞かないと判断した冬彌は仕方なく味噌の和え物にすることにした。

そんなミソミソばかりでは飽きないかとおもうが、どうやら呂布のツボにはまったらしくいっこうに飽きる気配がない。

それどころか調理の仕方ー炒める・和える・溶かすーによって微妙に変わってくる味を楽しんでいる節すらある。冬彌にはもはや止めようがなかった。

だからといって冬彌もただで屈するわけにはいかない。ひとすくい。ほんのひとすくいでいい。次の種味噌を確保するのだった。

「鉄拐！　まだなのですか！！」

「はいはい……今だしますよ……」

こうしてお昼時に開催された呂家での食事会は終わる兆しを見せず過ぎていく……

夕方、空は完全にあかね色に染まりきりもう夜のとばりが賭けられ始めだした頃、そこにはようやく落ち着いてお茶をすする呂布がいた。

ちなみに冬彌と陳宮は働き過ぎで倒れ込んでいる。

「鉄拐、ねね。とってもおいしかった」

「それは……」

「よかった……のです……」

調理やら配膳やらをしていた二人は既にグロッキーだ。というかこの二人、働くばかりでこんな時間になってもまだ昼食にありつけていない。一食抜くことになってしまったのだからこの状態になって当たり前であった。

「ま、満足していただけましたか？」

「……うん」

冬彌の努力と陳宮の脅迫が報われた（？）瞬間であった。

だがそこに呂布がなお爆弾を投下する！

「……もうちょっとで晩ご飯」

「ま、まだ食べるのですか？」

「一日三食」

「もう三食分食べたと思いますが……」

「……三回食べないと頭が働かない」

それはその通りである。一日三回の食事をしないと脳がちゃんと活動できるだけのエネルギーが確保できないと言われている。しかし……

（なぜこの時代の呂布が知っている！？）

「ともかく、ねねたちは食べていないのですから晩ご飯をつくるのです」

「……了解」

「……今度はみんなで食べる」

「「……はぁ」」

長い長いため息が呂家の中でこだました。

陳宮と冬彌はどうにか体を起こすと、先ほどまでと同じように料理の準備を始める。

もう二人はなれたものでまるで熟年夫婦のような呼吸で料理を作り上げていく。

「……味噌、もうない？」

「全部自分で食べましたよっ！！」

「……残念」

さもありなん。

第九話　かくして彼の平穏は終わりを告げた（前書き）

さてさて、ちょっとだけ早め（十分おせーよｗ）の更新です。
題名はやたらシリアスですが内容は非常にのんびりとしています。
ですのでそこまで期待しないで下さいｗ

第九話　かくして彼の平穏は終わりを告げた

鍋騒動の日から三日。いよいよ冬彌が城に召喚されることになった。

董卓を助けたこと、そして鬼のような形相で鍋をつくっていたことが市民の間に噂として完全に定着してしまっており、呼び出されたと言うことも瞬く間に広がっていった。もはや見世物扱いである。

さすがに冬彌もこれには後悔しているが、すでに後の祭。人の噂も七十五日と諦めるほかなかった。

「ええっと……賈？殿に呼ばれてきたのですが……」

「んん？　ああ、あの噂の……話は伺っております。どうぞ中へ」

門番も当然この対応だ。できればその噂が董卓を助けたという方であってほしいと心から願う。

「場所はわかりますか？　玉座の間の横にある会議室となっておりますが……宰相様はいつもの部屋と言えばわかる、と」

「あ、あの部屋ですね……たぶんですけど」

冬彌が知っている会議室と言えば、本来の目的ではない食事をし

たというあの部屋だけだ。
賈？が言えばわかると言うことはその場所であっているのだろう。
「そうですか。ではお気をつけて……」
なにだよっ！
心の底からの叫びは放たれることなく急速にしぼんでいく。
城の廊下を歩けば目を向けられるのはもちろん奇異の色のものばかり。時々いったい何用かと尋ねられることもあるが、賈？に呼ばれたと話すとほとんどの人間があの噂の、とすぐにどこかに行ってしまうのだった。
「おはようございます、鉄拐様」
「あ、その節はどうも……」
「いえいえ、手当も身の回りのお世話も私たちの役目。喜びこそすれ何をためらう必要がありましょう」
彼女の名は黄奎（オウケイ）。
先日、（主に空腹で）倒れていた鉄拐を介抱していた人だ。
情報通の彼女は洛陽で起こったことはその一刻後には既に知っていると言うから驚きだ。噂など特に気にもしないような人であるが、その一方で噂好きという面も持っているから非常にややこしいとい

うのが冬彌の評価である。

「今日は何の用事なんですか？」

「知っていて聞いているでしょう？」

「ええ、もちろん！」

実にいい笑顔である。心底楽しんでいるのだろうとよくわかるそれは、周りからすれば迷惑以外の何者でもない。

しかし呂家の料理番というやもするとどうなるかわからないような相手にこんなに砕けていていい物なのだろうか？

彼女の立場が心配な冬彌である。

「……もういきますよ？　いいでしょう？」

「ええどうぞ」

黄奎の横を通り抜け会議室へと向かうが、黄奎はその後ろからついてきていていっこうに離れようとはしない。

「……からかってます？」

「いえ、全く」

さらにしばらく歩くがつかず離れずの距離を保ったままだ。

「からかっているでしょう？」

「いえ、私の用事がこちら側ですので」

「……会ったとき、こっちから向こうに歩いて行きませんでした？」

冬彌はややいらいらしながら城門の方を指さす。

「はい。そちらへ歩いておりましたよ？」

「だったら――！！」

「お静かに。もう会議室前です。将軍様たちにつまらない口げんかを聞かせるおつもりですか？」

ここぞとばかりに侍女らしい態度を取って冬彌を牽制する。

「くっ……」

「ではこれで」

捨て台詞すら遮って厨房の方へ歩いて行った。昼食の準備があるのだろう。もう半刻ほどでちょうどお昼時だ。

「李鉄拐です。入ってもよろしいですか？」

「鉄拐？　いいわよ。ちょうどみんなそろったところだし始めるわ」

賈？の宣言とともに今回の会議が始まった。

「結論から言うわ。鉄拐、あなたにはボクの補佐をしてもらう」

「補佐、ですか？」

「そう。他の役職も考えたのだけれど、いいところがなかったから」

「……料理番」

呂布が名残惜しそうにつぶやく。そんなに味噌料理が食べたいのだろうか？

先日食べて以来、時々思い出したように大豆を漬け込んでいる瓶（今度は結構大きめ）を眺めていることがある。それを見るたびにほほえましくなるのだが……もしよだれを垂らしながらだったら呂布に対する評価を改める必要があるかも知れない。そんなことを考える冬彌だった。

「だからだめだと言っただろう？　たとえ他の全員が納得しようとも私が許さん！」

「……とまぁこんな具合に、ね」

「はあ……ですが賈？殿はお一人で十分役目を果たしているではありませんか。私ごときがその補佐などできることではないと思うのですが」

（……意外と鋭いわね）

（……案外油断ならんやっちゃなー）

「まあある程度はできているけど、ボクも人間だしね。あれこれやって変な過失ばかりするわけにもいかないのよ」

「そのこぼれたところを補佐するっちゅうのが鉄拐の役目や。まあ体のいい小間使いだと思ってくれてエエ」

「ねねにだってほしいのですが……」

「……といっておられますが？」

まあこれも事前に話し合われたものである。間を開けることなく賈？が口を開く。

「あんたねぇ……城下の噂を知らないの？」

「？　基本的に城下は市場くらいしか出歩かないので」

「はぁ……」

「ここまで自分に無自覚なやつも珍しいのです……」

「簡単に言えば英雄視されてるんや。考えてもみぃ、突然現れた詳細不明の男がいきなり将軍家の料理番。これだけでも異例やっちゅうのに、仙術……やったか？　訳もわからん方法で月（ユエ）を助けたやろ？」

「仙術といってもただ水を集めるだけのものですが……」

「あのときはありがとうございました」

「いえ、もうお礼はいただいてますので」

「それでもありがとうございました」

「その……どう致しまして」

どう答えていいかと迷った冬彌だが、無難な物に落ち着いた。それでも董卓はうれしそうでニコニコしている。

（本当にいい子だよなぁ……）

未だに冬彌の頭の中では長いあごひげを蓄えたメタボなおっさん

のイメージが頭から抜けない。洛陽に居を移してからおかしくなったということもあるのだろうが、目の前の少女が暴政を働くようになるとは全く思えないのだった。

「月の話と恋の話が同一人物の話だという噂は立ってない。けどな、兵士の間では既に周知の事実。中には鉄拐の顔を知っているやつもいるんや」

「そうなるとねねの下じゃ役不足なのよ」

「甚だ不本意ですがその通りなのです……」

「地位こそそこそこ高いもののねねは文官の一人でしかない。そうは言っても事情を理解した上でつけられる上官はここにいる人間だけ。鉄拐は武術はできるの？」

「……少なくともここにいる呂布殿、華雄殿、張遼殿の部隊に勤められるほどの実力があるとは思えません」

元漁師であることから腕力なんかに自信はあってもそれは武術のものとは全く異なる。単純に力があるだけでは何の役にも立たないだろう。

いや、ここにいる武将相手には腕力のみでも勝てる気がしない冬彌だった。

「となるとボクの下につけるしかないわけ」

「……料理番」

「ええい！　まだ言うか！」

「ねねも若干残念なのですが……」

「諦めなさい。まあそんなわけでこれからは恋やねねと一緒に登城するように」

「……はい」

「せっかくだからびしばし鍛えてあげるわよ？」

「え、あ、その……お手柔らかに……」

世話になっている以上、肯定以外の選択肢がない冬彌は深々と頭を下げるのだった。

「……おなかすいた」

「そろそろ昼時やな」

「せっかくだから今日もみんなで食べませんか？」

「そうですな。鉄拐、準備するのです」

「え？　あの、いいんですか？」

「いい訳なかろう！！」

華雄が吠える。後ろに獣じみたエフェクトが見えたような気がするが、きっと気のせいだと信じたい。いくら彼女が猪将軍だからといってそれはないと信じたい。

「ねね、ここは城や。準備するのは侍女がやる」

「むう……ついいつもの癖で……」

「でも鉄拐が食事する予定なんてなかったと思うんだけど、大丈夫かしら？」

「こんなこともあろうかと！！」

突然会議場の扉が開かれその向こうから数人の侍女たちがやってきた。その先頭は黄奎さんである。

まるで真っ白な某建物のごとく侍女たちがぞろぞろと歩くのは圧巻を通り越して恐怖すら覚える。

「鉄拐様が来られると聞いていつもより多めに食事を作らせていただきました。呂布様がもう一人おられても大丈夫です！！」

なんということでしょう。ずらりと並ぶそれはまさに中華のフルコース。

色とりどり、よりどりみどりのその様は満漢全席には遠く及ばないが、今まで冬彌が見たこともない贅沢なものだった。

「……いっぱい食べられる」

「恋殿、今取ってくるのです」

「詠ちゃん、あれ食べていい？」

「もちろん。あ、ボクはこっちをよろしく」

「酒はないんか～？」

「おお！　猪肉とはなかなか。ではこれをもらうぞ」

「張遼殿、さすがに真っ昼間からお酒というのはどうかと……体にもよくありませんし」

冬彌がたしなめるも誰もそれを聞いていない。
それほどまでにおなかがすいていたのだろう。目の前の料理に夢中だった。

「鉄拐様……どうされますか？」

「もういいですっ！　黄奎さん、お皿っ！！」

「どうぞ」

同じくおなかが減っている冬彌も若干キレながら昼食をほおばるのだった。

――その頃、陳留の近く黄河の沿いの村では黙々と手を動かしていた少女がいた。動かしていた少女がいた。

「ぶえっくしゅ！！！」

「どうしたの？　風邪でも引いたの？」

「いや、そんなことないねんけどな」

「大方仕事をサボっていつもの小屋で寝てしまったんだろう？」

「そんなんちゃうわ！！　なんかうちの存在意義が危ぶまれたような気が……」

「あはははは！　真桜ちゃんがおもしろいこと言ってるの～」

「おもしろいことあるか！」

「かごを編まないんだったら今ここでの存在理由はない」

「な、凪。それは……」

「理解したのならさっさと編め。もうすぐ夕飯だぞ」

「うちに編むなっちゅうフリやな！？」

「どこをどう聞いたらそうなる！？」

「うちの勘が告げとる。ここはもうしばらく手を止めるべきやと」

「そんな役に立たない勘なんか捨ててしまえ！！」

「真桜ちゃ～ん。その勘に従うと夕ご飯抜きになるの～」

「そっそれは……イタイ……」

「そう思うならさっさとしろ。私たちに与えられた仕事なんだ。全部終わらせないと夕食抜きになる……」

「ならこの全自動からくり竹籠編み機で！！」

「それはこの前使えなかっただろう！」

「何を言うてんねん。改良したに決まってるやん」

「……きっとこれで失敗したら明日の朝もご飯抜きなの」

「沙和、それはやれっちゅうフリなんやな？」

「そんなつもりで言ってないの～」

「いいかげんにしろ！！」

平和な頃のそんな一幕。きっと懐かしくも寂しさを思い出す、そんなひととき。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2943p/

紛れる彼の隠密演義(仮)

2011年10月6日08時28分発行